曹洞大學教頭 山田孝道著

處世要訣 修養禪話

東京 文泉堂書房
服部書店

324-マ74

處世要訣 修養禪話

明治
44.12.27
内交

序

佛法は世法に異ならず、世法は佛法に異ならず。參禪悟道、亦立身處世の法に外ならず。然るに世俗多くは釣名射利を以て、立身處世の要術となし、逃世灰心を以て、參禪悟道の妙趣となす。豈に錯らずや。此編は、嘗て緣に隨ひ機に對して說話する所のもにして、固より秩序聯絡なしと雖も、諸篇皆禪旨を以て、悟道處世の訓を說く、今書肆の屬に應じ、緝めて一卷となし、以て印行に附す。

若し意を得て之を讀まば、則ち世俗の錯に陷らず、自ら立身處世の修養に得る所あらん。

明治四十四年十二月

著者識

處世要訣 修養禪話 目次

第一　眞正の信心……一

猿芝居……學識あるも信心なき者は猿の如し……徒に現世の利益、未來の福報を祈るは信心にあらず……蓮如上人の信心の意義……心如白雲の歌……夏の虫の發句……華嚴經の語……承陽大師の信心……犬と猿との狂歌……相馬燒の菓子器の話……梵網經の信心の語……信現成の所は佛祖現成の處なり……明慧上人の明書

第二　眞實の寶……一八

一休禪師元旦に髑髏を振りまわせし事……元旦の狂句……丈草禪師「ねころび草」の語……盤珪禪師不生佛心の垂示……鈴木正三老人「萬民德用」の語……佛法を世間に德用すべき事……正しく佛法を信ずる是れ眞實の寶なる事

第三　苦と樂……三五

近年苦悶、煩惱多くなりし事……(一)印度外道の三苦……(二)四苦八苦……(三)孟子の三樂……(四)佛者の三樂……(五)苦樂の根源……(六)苦樂の辨……(七)苦樂解脫の例……(八)苦樂解脫の法……(九)

第四　順境と逆境……五四

(一)信心銘の話……白樂天の行路難……傅大士行路易……大道無難易……順逆は境にあらず人にあり……(二)海舟と南洲……(三)海舟順境を超脫す……(四)海舟劍術と禪學とによつて修養す……(五)修養によつて逆境を轉じて順境となす……(六)安部磐根逆境に在つて修養し順境に轉せられず……(七)安部井翁一喝の下に居享を議長せしむ……折田福島縣知事を喝破す……(八)順境を守ること能はざれは逆境となる……(九)苦樂順逆は自己一念にあり……中納言敎忠の歌……洪自誠の語

第五　意志の鍛錬……七四

(一)智情意共に圓滿の發達を要すべき事……(二)封建時代は智識の發達よりも意志の鍛錬を重せし事……(三)情意と伴はざる智識の發達は野獸の如し……(四)印度支那朝鮮の衰亡は道德の衰頽に由る……(五)我國今日の困弊は國民の意志薄弱に由る……(六)孟子、トーマスフラウ、セネカ、の謂はゆる大丈夫、勇者、大人禪に若くはなし……(七)乞食の大丈夫……(八)意志を鍛錬するは坐

第六　身心脫落……九八

(一)吾我を離る……承陽大師の語……三毒を滅する……これ成佛得道なり……某律師辨當を拋つ……盤珪禪師明德を疑ひ苦行參禪せる事……(二)知足……佛遺敎經……行誠上人の歌……澤庵禪師の手紙……(三)堪忍……堪忍錄、知足錄、佛遺敎經、……(四)文盲者の堪忍……(五)堪忍の稗右……柳澤洪園……(六)中澤道二の堪忍……(七)石田梅巖の修養

第七　警世小言……一一七

(一)佛法の大意……白樂天と道林禪師との問答……

(二)雲華の感化……賴山陽眞宗の學長法海上人の一吗に遇して篤孝の士となる……

(三)獄中に在つて孟子を講ず……吉田松陰……

(四)福澤翁の訓誡……不孝の蒸取人孝子となる

第八　立身處世の道……一二六

(一)立身……權謀術數を以て富貴を得るも立身と云ふべからず……孔子の立身……似而非孔雀……(二)至誠……觀無量壽經……中庸……二宮尊德の訓誡……井上角五郎の勤勉……西郷南洲の成功訣……(三)虛圓……益者三友、損者三友……三人行必有我師……尾上菊五郎の注意……一休和尚の歌……華嚴經處生の語……山岡鐵舟富士山の歌

第九　成功の要訣……一四〇

(一)成功の眞僞を識るべし……(二)人の字義を了解すべき事……(三)西洋の個人主義、自我發展主義を誤解すべからず……近來の成功者と稱する者には失敗多し……(四)他人の感情を察すべき事……(五)植木を取扱ふにも其情を損せず……馬を取扱ふにも其情を察すべき事……(六)ナポレヲンとワシントンと成敗……(七)信長、秀吉、家康、三人の相異の點……(八)成功の要訣は他人の情を失はざるに在り

第十　出世の話……一五一

(一)世に出でると、世を出でること……(二)世間の字義……世は遷流の義……世間の俳句、小野小町の歌……(5)いろは今樣歌……生老病死、生住異滅、成住壞空……世間は無情なるか故に變化あり……(三)世間の間は差別の義なり……箱根山籠に乘る人……雞寒上樹、鳴下寒水、……(四)兎角浮世はまゝならぬ……そこらあたりはまゝだらけ……洪自誠の語、出世の道……佛心は世間を覺る……佛は世間を解す……世間を超出で橫出の別……三界を出るは三毒を滅するなり……心の塵苦を滅すれば即ち眞の出世なり……今日世界が我

處世要訣修養講話目次

物じや……貧の世界に住ひがよい……(五)世俗の出世は眞の出世に非す

第十一　太平樂話……一六九

(一)太平は心の持樣にあり……(二)長さよ願なき身の神詣……貧乏人の金毘維へ立願……黃檗禪師の無求の禮佛……(三)手折らるゝ袖に香るや梅の花……千頃と紫玉禪師との問答……劉寶饒の寬仁大度……(四)雪の日夜はあれも人の子樽拾ひ……司馬溫公の一字訓、陶淵明か其子に送りし手紙……(五)元旦や後にちかき大晦日……井上直孝の油斷大敵……(六)女に惚れ職業に惚れ場所に惚れ……薩摩治兵衛の成功……(七)慈心老心大心……承陽大師典座教訓

第十二　佛敎と婦人……一八六

佛敎上の婦人の位置……日本は古來男女平等主義なりし事……平安朝以來男尊女卑となりし事……維新以來男女同權の傾向を生せしこと……佛敎は男女平等主義なり……

……佛敎の平等主義は高處は高平、低處は低平なり……西洋の男女同權は眞實の平等主義にあらず

第十三　婦人の莊嚴……一九八

婦人は莊嚴を以て生命となす……慚耻の服は諸の莊嚴に於て最も第一なりとす……愧無き者は禽獸と異ならず……山内一豊の室齋藤氏……佛敎の美人……法を聞く者は端正殊好となる

第十四　唯我獨尊……二〇六

(一)釋尊以前の宗敎……(二)釋尊の出現……(三)釋尊の主義及効果……佛人ジュリー氏、シャネー氏、英人マッキスミラー氏米人アーサー、リリー氏の評言……(四)唯我獨尊の意義……承陽大師、二宮尊德の解……雲門禪師の垂示……丹霞禪師の作行……英人アイテル氏、獨人スピンネル氏の評語……(五)獨立自尊の實行……福澤翁の生涯

第十五　不生不滅……二一八

(一)二祖三佛會……(二)涅槃の意義……萬法一心……

……生死即涅槃……吉田松陰の不生不滅……(三)
釋尊の臨終……(四)釋尊の慈悲……(五)賢母の愛育……
(六)孝女の報恩……(七)報恩の行持

處世要訣 修養禪話

目次終

處世要訣 修養禪話

山田孝道述

一 眞正の信心

余が幼年の時に猿芝居を觀たことがある。伽羅先代萩の狂言であつたが、衣裳を着けて演るとはいひながら、それ〳〵の役が能く箝まつて居て、起居動作スックリ人間の演ると同じであつたから、觀客も一同にその技に感心して居た。サヲ八汐が千松を懷劍で刺し殺すところに至つて、後の方の觀客の一人が、突然に柿を一つ舞臺へ抛り擲げた。スルト今まで人間の通りに藝を演うて居た猿共が、一時にその藝を止めて、政岡も鶴千代も八汐も、殺されて居た千松も皆飛び出して、その柿を捉らうと爭ひ、キイ〳〵と叫びわめき始めたので、猿使は鞭を揮つて「この畜生」といひながら、片端から打つたので、猿共はいよ〳〵叫び噪ぎ回るやうになつたから、觀客は

……生死即涅槃……吉田松陰の不生不滅……(三)
釋尊の臨終……(四)釋尊の慈悲……(五)賢母の愛育……
(六)孝女の報恩……(七)報恩の行持

處世要訣　修養禪話

山田孝道述

一　眞正の信心

余が幼年の時に猿芝居を觀たことがある。伽羅先代萩の狂言であつたが、衣裳を着けて演るとはいひながら、それ〳〵の役が能く箝まつて居て、起居動作スックリ人間の演ると同じであつたから、觀客も一同にその技に感心して居た。サテ八汐が千松を懐劒で刺し殺すところに至つて、後の方の觀客の一人が、突然に柿を一つ舞臺へ拋り擲げた。スルト今まで人間の通りに藝を演つて居た猿共が、一時にその藝を止めて、政岡も鶴千代も八汐も、殺されて居た千松も皆飛び出して、その柿を捉らうと爭ひ、キイ〳〵と叫びわめき始めたので、猿使は鞭を揮つて「この畜生」といひながら、片端から打つたので、猿共はいよ〳〵叫び噪ぎ回るやうになつたから、觀客は

一度にドット吹き出して大笑をしたことがある。猿は動物の中で最も人間に近い獣であるので、敎へこめば人間の爲る芝居でも、夛かく觀客を感心させるほど巧みに演るのであるけれども、只食物を得たいといふ念から、敎へられる通りに習うて覺えたまでゝ、銘々が演る藝題の旨意も、演る役々の人物柄も、少しも自分には知らず、自分は今どんな役をつとめて居るといふことを知らぬ。それゆゑに何時でも食物が目の前に出れば、忽ちその役を止めて其の食物を捉らうとするのである。人間は之を觀て大いに笑うて居るけれども、かやうな事は猿ばかりではなく、人間も猿と同樣な事をして居るものが澤山ある。

（2）

先年敎科書事件で、中學小學の敎員、視學官、縣知事等の人々が、賄賂を取つたといふので、一時に多勢牢屋に投り込まれたことがあつた時、新聞に、

小言をも変せて歌ひつ猿廻し

といふ句が出たので、余は之を讀んで、幼年の時に觀た猿芝居の事を憶ひ出し、ア、此の句は面白い。斯く牢屋に入れられた人々は、いづれも學問知識があり、倫理道徳の大切なことも能く知りぬいて、人に向つて之を敎へ諭す身分であるから、人間の履むべき道を講釋させれば、古今東西の學説や類例を拔いて、縱横自在に辯せられるであらうが、只惜いことには、自身にそれを信じて居ないのであらうと思はれる。若し自身に愆に信じて居たならば、決してあんな眞似をすることは出來ぬ。譬へば火は物を燒くものであるといふことを、何程人からいはれ、自身にもさうであると思うて居ても、實際に火の燒くといふことを知らない時は、火に手をかけて傷を受けることがある。幼兒に火に觸ると痛た〳〵をするから、必ず手を出してはならぬといひ聞かせて置いても、親達の目がはづれた時は、ツヒ手をかけて傷をする。しかるに一度指の先でも燒いてからは、その後は線香の火を見ても、恐しがつて逃げ出すものである。これは

（3）

幼兒自身に於いて火は物を燒くものであるから、觸られぬといふことを信じて居るからである。彼の敎員や學士達が、學問をして種々の事柄を覺えて、それで立派な人間であると思うて、それ〳〵の役をつとめて居ても、當人自身にシカと自身の位地を知りぬいて、深く信じて居ないから、反物や菓子折を目の前へつき出されると、忽ちその役目を忘れて其の品物を奪ひ合ふ。丁度猿が芝居を演つて居る最中へ、柿や栗を抛り出されるので、猿使に鞭で打たれるやうに、立派な身分でありながら、牢屋へ打ち込まれて臭い飯を食はされるのであるが、ナント情ないことではないか。昔しから猿智慧といふことを申すが、シッカリとした信心といふことは、どういふことかといふに、外ではない。自己を信ずるといふことである。しかるに此の信心といふことが、世間の人に多く誤解せられてあつて、智慧の無い

婦女幼兒や、老爺老媼のやうな者でなければ、その必要が無いものと思はれてある。尤も誰某ば信心家である。不動尊や、弘法大師に月詣をし、時々莫大の寄附金を納められ、朝晩眞言陀羅尼を唱へて、僧侶も及ばぬほどの勤めをせられる。イヤ誰某は非常な信心家である。善光寺樣や、本願寺樣へは毎年參詣し、自分の家でも念佛三昧で居られると。かやうに申す人がありますが、サテその人々の外面はよしとして、その內面の心を探つて見れば、イヤハヤ人前では話されぬほどの我儘身勝負得手勝手、自分の當然勤めにやならぬことをつとめずして置いて、不動尊や弘法大師に向つて、金が儲かるやう、立身出世がなるやう、病氣が全快するやう、サテハ死んでも命があるやうといふやうな、强慾な事ばかりを祈つて居る人もあれば、又現世の事は兎も角も、未來は是非とも極樂淨土に往生して、あらゆる快樂を極めたいといふ事を、阿彌陀如來に願うて居る人もある。それも只一通なれば未だしものことであるが、甚しきは流行神樣と

稱して、狐や狸に供物をして、種々と無理な願をして居る人も澤山ある。是れを世間では信心といふけれども、決して佛法の信心ではない。皆凡夫の迷心から出たものであるから、迷信と申すものである。蓮如上人も、

信心とは、まことの心とよめるなり。まことの心とよむ上は、凡夫の迷心にあらず、全く佛心なり。

といはれてある。しかるに前にいふた人々の心は、まことの心ではない。只々自分の我慾身勝負を通したいといふ、極めて甚しい貪欲心から出たのである。

全體人の心といふものは、今嬉しいと思うても、又忽ち悲しくなり、前には好いて居たのが、又忽ち嫌ひになり、喜ぶかと思へば忽ち怒り、時々刻々事に臨み物に對して、コロ〳〵と玉の轉るやうに移り變るものであるから、コロといふ訓をつけたものである。うつりゆく初めも果もしらくものは

あやしきものはこゝろなりけり

といふ古歌の通りで、實に少しも當にならぬものである、しかし世間は浮世といふから、一年の中に春夏秋冬の移りかはりがある如く、人にも吉凶禍福、榮枯盛衰の變化は免れないのであるが、その變遷のある度毎に、自分の心がコロ〳〵と轉がり廻つて、秋の木の葉が風に吹かれてコロゲ廻るやうであつては、遂に泥溝の中か、小便桶の中へ落ち込むと同樣に、苦痛の悲境に沈み込むより外はない。折角萬物の靈長と生れて來ながら、猿芝居の眞似や、秋の落葉のやうな最後を遂げるといふは歎はしいことである。ソコデ佛祖聖賢が出世あらせられて、斯る苦痛を救うて安樂な境界を得させてやりたいとの御慈悲より、種々樣々と御化導あらせられ、眞實の信心を發得して、如何なる浮世の變遷に遇うても、ビクともせず、易々と生涯の送られるやうに御諭しなされるのであるのに、凡夫の淺ましさには、又しても己れが少しばかりの猿智慧を恃みにして、我儘勝手を

働き、或は無理非道な願望を起して、我れと自ら苦痛の悲境に陥るとは、

大慈悲を又無にしたか夏の蟲

といふ古句の如く、實に憐れ至極なことである。然らば眞正の信心といふは、どう心得るのであるかといふに、『華嚴經』に、

佛心と自心と二無し

とあつて、之をシカト心に信じて疑はぬのを眞正の信心といふ。蓮柏の釋には、

心の外に佛ありと思ふは信心と名けず、邪見の人と名く

とあつて、佛祖聖賢と雖も、我々と雖も、少しも別なものではない。高祖承陽大師は

佛道を信ずる者は、須く自己本、道中に在りて、迷惑せず、顚倒せず、增減無く、誤謬無きことを信ずべし、

と御論になつてある。この御旨意は、我々一切衆生は、佛とは遙に

相違し、智慧も德も缺けて居るから、迷ひもすれば、顚倒もするのが當然であると思うて居るのが、抑も大きな迷ひ、大きな誤りである。佛祖の眼から御覽になれば、我々は決して佛祖と異なつて居らぬ。本來少しも迷つても誤つても居らぬと信せよとのことである。サテがういはれても直ちに合點がゆきかねるであらうが、能く〳〵考へて見るがよい。釋迦牟尼如來でも、達磨大師でも、高祖承陽大師でも、同じ人間であつてみれば、耳、目、鼻、口、手足五體、少しも異なつたことはない。その身體が異なつて居なければ、其の心も異なつて居るわけがない。二と二を合すれば四となる。桃の花は紅に見え、松は綠に見え、水は冷かに、火は熱く感ぜられることは、釋迦も達磨も吾々も少しも違つたことはない。釋迦や達磨は、只こ吾々とても同じく此の法則にの法則の通りに萬事を處してゆかれ、隨うてゆくのであるが、サテ人間の事になるといふと、忽ち得手勝手な考を起し、二二の四となるのを八と致さうとかゝり、水を火の

やうに取り扱はうとするやうな事をする。是れが即ち煩惱妄想である。この煩惱妄想を捉へて、銘々の本心と誤り、その煩惱妄想の通りを萬事に行はうとする、此方がかやうに出掛れば、先方も又そうはさせぬと出て來る。ソコデ水入らずの夫婦さしむかひの間でも、遂に、

さると言ふ夫に嗅はいぬといふ

犬と猿との喧嘩なりけり

といふやうな事になる。契老同穴を誓つた夫婦の間でさへ此の通りであれば、父子兄弟の間も、親戚朋友の間も、人間の交りは出來ぬことになる。かくては未來を待たず、此の世から畜生道に墮ちて居るといふものである。本から畜生に生れたならば致方もないが、幸に人間に生れて來て、佛祖の敎を承れば充分に合點の出來る身であつて、我れと自ら斯る悲境に陷らなくてもよいわけである。

余が雲水修行の時、或家の夫人から、菓子器にせよと、一個の磁

器を貰うた。一寸見た處では汚れ切つて居たので、平常何氣なく粗末な器と同樣に用ゐて居た。その後寺に住職するやうになつても、矢張同樣に使うて居た。然るに或る日出入の盛屋で骨董の目利をする某が來たので、茶を出すのに例の鉢に菓子を盛つて出した。スルト某が之を見て、熟いた樣子でその鉢を手に取つて、頻りに撫で廻して見て居たが、遂に口を開いて、「方丈樣此の器は大層結構な器でありますな。斯樣な品を平常にゾンザイに用ゐなさると、誤つて破すことがあります。貴僧は此の器の性質を御存知の上で、かやうにゾンザイに御使ひなされますか。一體貴僧これは何と思召すか」といふ。余は固より一向に知らぬことであるから、有體に「イヤ少しも知らぬ。實は斯樣〳〵で貰うたので、只何とも思はず今日迄使うて居る」といへば、某は「さやうでありませう。さうでなくては斯樣の品をムザ〳〵と御使ひなされることはない筈であります。私はキット古代相馬燒と思ひます。餘り汚れて居て分かりかねますが、

能く洗ひさしたらば分明と致します」というて、流水下に持つてゆき、鹽を以つて能く〳〵垢や塵を洗ひ落して、「矢張私の見た通りであります。御覽なさい、茲に馬が二匹薄らと見得ます。是れが相馬燒の證據であります」といはれ、始めて氣が付いて、手に把つて見れば、如何にも馬の繪がアリ〳〵と見得、そうして同時に何となく古色蒼然として愛すべき風韻があるやうに思はれた。そこで流石は骨董の目利をする人ほどあつて、能く鑑定したものであると感心した。サテ某のいふのには、「裏の方は此儘に致して置く方が、時代の立つて居ることが一目に見えてよろしう御座いますから、表の方を今少しく洗うて大切に致して、貴賓の席に御用ひなされるがようございます」といはれ、茲に初めてその鉢が貴重な品であるといふことを知り、それから袱に包み大切に納めて置いて、時々來賓の席に用ゐることに致した。

吾々も無始劫來極惡深重の凡夫であるとばかりに思ひ込み、煩惱

妄想の起るのも當然、我慢勝手の出るのもその筈、貪欲瞋恚愚痴の三毒が、朝から晩まで起り通しになつて居るのも道理であると、我れと自ら己が身を卑しめ、惡業の出來るだけを爲し通して居るといふものは、我々自身の價値を知らず、粗末千萬に取扱つて居るといふもので、丁度余が古代相馬の磁器であるといふことを知らず、臺所の常用に使うて居たやうなものである。しかし余は一たび彼の骨董家の目利によつて貴重の品であるといふことを知つた上は、深く之を信じて大切に取扱うことに致しましたが、これは余ばかりではありますまい。大抵の人が皆そうであらうと思ひます。若し如何ほど貴重の品であるといふことが知れて居ても、イヤ自分は是れまで下等の粗品と思うて使うて居たものであるから、今何程の價があるというても、矢張元の通り粗末の品として取扱うと申す方は、百人に一人も有るまい。茶碗や菓子鉢は何程高價な品でも、多寡が此方の使ふ道具に過ぎぬ。その道具でさへ、かうであつてみれば、況し

て自分の身の價値の貴いことを論され、釋迦牟尼如來や、達磨大師と同樣で、少しも變りの無い佛心を具へて居るといふことが知れても、それでも己れは凡夫であると、下劣の罪人であると強情を張つて、ドコまでも苦境に沈まねばならぬといふことはない筈である。『圓覺經』には、

始めて衆生本來成佛なることを知る

とあり。『梵網經』には、

大衆、心に諦に信せよ、汝は是れ當成の佛、我れは是れ已成の佛なり、常に此の如くの信を作せば、戒品已に具足す

とある。是れは佛法の戒法といふものが、何百ケ條とあるけれども、釋迦牟尼如來は、既に佛と御成りなされた方、我々は是れより後キット成るべき佛ぞといふ信念が定まつてさへ居れば、それでモー戒法を持つべき資格が具つて居るから、必ず成佛するに相違はないとの御諭である。こゝの處を高祖承陽大師は、

大凡そ信現成する所は、佛祖現成の處なり

と仰せられてある。既に佛祖が御懇に保證をなされて、三千年以來、東西の諸國に傳つて來て居るからは必ず間違ひは無いと深く心に信じて、如何なる場合にも斷して疑はないのが、眞正の信心決定と申すものである。

然らば斯く信心決定したならば、それからドウいふやうに身の行をなすべきかといふに、强ひて加持祈禱に憂身をやつして、是れまでのやうに福利を願ふに及ばず、念佛唱題三昧になつて未來の往生を頼むに及ばず、只此の信心の上にこれまでの如く其の身分〳〵に隨うて、其の日〳〵の務めをなしてゆく丈のことである。

梅尾の明慧上人は、

私れに一つの明言あり。私れは後生助からんとは申さず、只現世に有るべきやうにあらんと申すなり。聖經の中にも、行すべきやうに行ひ、振舞ふべきやうに振舞へよとこそ說き置かれたれ。現

世にはとてもかくてもあれ、後生ばかり助かれと說かれたる聖教は無きなり。

と言はれてあるが、この有るべき樣といふは、別なことではない。只「佛心と自心と二つ無し」といふ、その信心の上に身分相應の事を務めるのである。高祖承陽大師は更に、

たゞ我が身をも心をも、はなちわすれて、佛にしたがひもてゆくとき、力をもいれず、心をもつひやさずして、生死をはなれ佛となる。たれの人か心にとゞこほるべき。佛となるにいとやすきみちあり。もろ〳〵の惡をつくらず、生死に着することなく、一切衆生の爲めにあはれみふかくして、上を敬ひ、下をあはれみ、よろづをいとふ心なく、ねがふ心なく、心におもふことなく、うれうることなき、これを佛となづく。また外にたつぬることなかれ。

と御諭しになつてある。この御詞に叶ふやうに心懸けて、朝夕の勤

めを行うてゆけば、浮世の荒波が如何ほど吹きすさみ、如何なる變動に出逢うても、富士山が天表に卓立して、少しも動かないやうに、泰然不動にして、大安樂の境界で、生涯を送ることか出來る。是れが眞正の信心と申すものであります。

一　眞實の寶

昔し一休禪師は、正月の元日に、竿の頭に髑髏をつるして、京洛中を高聲にて「御用心々々〳〵々々」と叫んで走りまはられた。ところが京洛中の人々の多くは、又しても一休の戯か。正月の元日早々から、髑髏をふりまはされてたまるものか。えんぎでもない。くはばらくはばらと云うて、鹽をふりちらして祓めをしたといふことである。

一休禪師の遣方は、如何にも世人の眼より見れば奇異なに相違ない。しかし是れは禪師が世人の夢を醒さん爲めの手段であつて、よく〳〵考へて見れば、なか〳〵妙味のある事である。しかるに之を一場の惡戯と思ふのは、思ふ者の誤りである。

一體正月元日は何故に芽出度いのであるか。又元日に髑髏をふりまはして、御用心々々々というて走りまはるのが、何でえんぎが惡いのか。何か確かな理由があるか。正月元日は年の始まりであるから、

吉事あれかしと祈るべきに、死人の遺骸のやうな忌はしき物をぶらまはすのはよろしくないと云ふ位の理由より外にはあるまい。しかしそれが大に間違つた話であつて、正月だとて、元日だとて、一年中の一月、一月中の一日で、十二月の三十一日と少しも異なつたことはない。只人間が便利上年の始として、之を祝ふだけのことであつて、人間以外の動物などに取つては少しも異なつたことはないのみならず、同じ人間でも國が違へば暦も違ふところもあつて、決して太陽暦を用ゆる國ばかりあるのではないから、何んで芽出度といふ確な理由はない。まして不幸にも親兄弟妻子等を此日に失ふた人には、今日は如何なる惡日かと思れるに相違ない。してみれば猶ほ以て正月だから元日だからとて、どうでも芽出度いといふ理由はないのである。しかしながら芽出度無いと云ふ理由もないのであるから、之を芽出度するとは、只その人の心一つにある。それゆゑに成るべく芽出度致したいのでこそ、一休禪師もか

ゝる事をせられたのである。

元日や去年の鬼が禮に來た

といふ古句を見ても、大晦日の夜まで赤鬼の如き人相で借金の催促をした者も、一夜明けて元日となれば昨日の樣子は何處へやら、生れ替つた人相で御慶の禮に來るといふが如く、家々注連をかけ、門松を立て、人々沐浴して春衣を着け、曆蘇雜煮餅を喫べ、にこにことして、娘の子は追羽子をつき、男の子は紙鳶をあげ、御神樂は獅子舞笛太鼓で、ピー〳〵どん〳〵と囃し立てるのを見聞すれば、何人も誠に芽出度と思はぬものはない、が是れは表面の有樣が去年と違ふから、心も違ふのであるけれども、只表面から來たことゆゑに、裏面即ち心の底から出て來たのではない。心の底から出て來たのでないから、少しく心の坐りどころが狂ふといふと、飛んだ事になつて仕舞ふ。

元日や又うか〳〵の始なり

といふ古句は、矢張一休禪師の警と同樣の意である。正月元日は一年の始めであるから、何んでもシッカリと氣を持つて。今年こそは一番甘く遣らねばならぬと、自ら戒めてかゝらねばならぬ。しかるに只芽出度芽出度に浮かされて仕舞つては、遂にうか〳〵の始で、一年中うか〳〵で通して仕舞はねばならぬ。かうなつては元日は芽出度吉日どころの騷ぎではなくて、實に悲しむべき惡日である。この句は一應洒落たやうにいふてあるけれども。その裏面には斯ることにならぬやうにといふ警の意があるのじや。

さて又闊饒は何故に不吉であるか。人の死んだ骸骨であるから、えんぎが惡いといふのか。生きとし生けるものは、何物にかぎらず死ぬるに相違ない。世の中に何ほどいつはりがあつても、これぱかりは間違がない。しかも人の生命は呼吸の間に在りというて、出た息が入らぬか、入つた息が出ぬやうになるが最後、直に此の世の暇乞をせねばならぬ。是れは如何なる英雄豪傑でも。才子佳人でも、富

貴も貧乏も、年寄も、若者も、少しも遠慮用捨はない。實に露の乾ぬ間の朝顔といふ、その朝顔の花に宿れる露よりも脆きものである。斯る脆きはかない生命を持つて居ながら、只うか〳〵と暮して仕舞た分では、鳥畜類に劣つた次第で、人と生れた甲斐はない。何故に人間が萬物の靈長と生れながら、斯る劣つた有樣で終るかといふに、外ではない。信心がないからである、といへば、イヤ我等は決して信心が無いことはない、何の神を信心して居る何の佛を信心して居るといはれるであらうが、その神佛はドウ信心して居らるるかといへば、それ〳〵の事を願うて居るとか、或は金銀財寶を得させて下さいとか、病氣災難を免るやうにと祈つて居るとか、さては現世の利益は祈らぬが、未來は淨土に往生するやうにと願つて居るとかに相違なからうが、それが抑も〳〵間違である。神佛を禮拜するのが惡いではないが、その祈願する心がけが違うて居るといふはドウいふ理由かといへば、是等の祈願は多く自分の身最負得手勝手

を依頼するのであるから、是等は信心ではなくて迷信である。迷信といふは、貪欲、瞋恚、愚痴の三毒の由つて起る根本で、佛敎では無明といふのである。無明といふは物の眞理に明かならぬ義であるが、これにも種々六ケ敷解釋があるけれども、一口に早分かりにいへば、ツマリ我見といふことである。この我見即ち「我れが」「己れが」といふ念があるから、貪欲、瞋恚、愚痴も起り、種々の妄想煩惱も生じ、次第に樣々の惡業をなすのである。かの身最負得手勝手といふものは、即ちこの貪欲、瞋恚、愚痴である、斯る三毒の心を以て神佛に祈願したとても、いかでその願望が成就しやうぞ

祈りても驗なきこそしるしなれ祈る心に誠なければといふ古歌の通りで、決して願望成就することはない。試に考へて見るがよい。神や佛は如何なる方である。元は吾等と同樣な人間に相違ないのだが、只普通人間の如く「我れが」「己れが」のかたまりではなく、否この「我れが」「己れが」といふ心を放れて、世の爲め人の爲めに盡

されたから、神や佛と尊崇せられてあるのである。しかるに人間が、三毒の心を以て、種々様々の我儘勝手を願つたとて、なんで受納せられることがあらうぞ。しからば信心とはドウいふ心かといへば、神佛の心、即ち神佛の仰せられた御言葉、神佛のなされたる行作を承り、固くそれを信じて少しも疑はぬ心である言ひ換へれば、「我れが」「己れが」といふ心をサッパリと振り捨てるのである。といへば、又これは我等が持つて生れて來たものであるから、捨てることは出來ぬといはれる方もあらうが。それが抑も〳〵間違である。そんなわけではない。我等は神や佛もかはらぬ心こそ持つて生れて來て居れ、外の物を持つて生れて來はせぬ。『涅槃經』に「一切衆生悉有佛性」とあつて、人間は勿論生きとし生けるものは悉く佛の性を有つて居るのである。一念信心發得すれば、佛心となることが出來る。すでに我等の心は佛心とかはらぬといふことがシカと信せられた上は、その通りに行はれてゆかねばならぬわけであるが、只口の上でばか

りで喋るのみであつて、心からシカと信心が出來ぬから、種々の妄想が起るのである。拔隊禪師の法語に、

自心の佛たること疑ひなくして、生死の厭ふべきもなく、佛法の求むべきもなし。虛空世界、たゞわが一心なり。たとへば夢の中に外にまよひ出て、我が故郷へかへるべき道をうしなひて、或は人に問ひ、或は神にいのれども、未だ歸り得ざるもの、其夢うち覺めぬれば、たゞ我がもとのねやの中にあり。此の時自ら夢の中の旅より歸ることは、さむるより外に別の道はなかりけりと知るが如し。これを本に還るとも云ひ、安樂世界に生るとも云へり。

と云はれてあるが、この覺むるといふことが、卽ち佛といふことで、佛は梵語で支那の語に譯すれば、覺者すなはち迷の夢のさめた人といふことである。しからば佛といふことは、何人にも大切なことであつて、決して不吉なことでもなく、えんぎの悪いこともない。し

かるに正月は芽出度月であるから、佛參はせぬがよい、佛參は盆の月、正月は神參すべきであるなどゝ、信心者といはれる人の中でもいふ方があるは、實にをかしなことである。佛が死んだものである から不吉であるといふならば、神は死んだ人ではないか。死んだ人が不吉であるといふならば、神も佛も同じく死んだ人であるではないか。それに一方を貪び一方を忌むといふは、何んたる間違であらう。それよりは未だをかしいことは、死んだものがイヤであるといふならば、正月に種々魚類等を用ふるが、あれも死んだものである。しかるにこれらの死んだのは、高い價を出して買ひ求め、丁重な料理をして、舌打ちをして賞味しながら、尊い人間の死んだのは、氣味が悪いとか、えんぎがわるいと忌み嫌ふといふのも、誠に馬鹿げたことであるまいか。こんな粗末な考を持つて居ながら、「我れはエラヒ」、「己れは豪氣な者」と、威張つて見ても、サッパリ價のないことである。そこで正月は一年の初めの月であるから、是れまで迷う

て居て、自ら四苦八苦の爲めに苦しめられて居たのだけれども、これから其の迷の夢をさまして、佛となつて眞實安樂の日送が出來るやうに致したい。しかるに世人の多くは此に心つかず、徒らに正月はただにぎやかに騷ぎ浮かれるものとのみ思うて居るのは、いかにもなげかはしいことである。丈草禪師は、『ねころび草』に、

つら〳〵世のはかなきならはし、あら玉の年立かへる注連かざりは、千代かけてさしそふ初日影とことぶきあへれども、わづかなる齡のはや一日をしづめて、終の薪の身をからしゆく光ならずや。松は蓬萊にひかれて、千年の陰をうしなひ、竹は左義長に燒かれて、百尺の綠をたふす。島海老の生ながら煮られて、さしもくるしげにかゞまりたる姿に、あやかれなどいへるはいかにぞや。田つくり數の子は、よしなき名のつきたるゆゑに、かばねをさらし、雉子のかしらはいけるがごとくもたげしめ、鯛の尾は、とびかへるべくはねしむれども、いつしか落ちくばみたる眼のうち、うら

めしげに牙噛いたしたる、いさゝかも悦べるけしきとは見えず。是のみならず、海にすなどり山に狩して、いま〳〵しき業つみかさね、股かひな、血しほ引きちらして、この日の賑とす。ものゝ命を奪ひて、おのれをたつることは、殘害の道なり。年月己のめぐみ初める三つのもとを愼みて、齢をのべ、命をたもたんとならば、かゝるたぐひも憐みすくはんこそ、天つ心にもかなふべきものなるを、ものいはざればとて、命のをしからざらんや。かたはしより屠りくるしめて、あはれよき春かなといへど、かれらが爲めには、けふはいかなる惡日ならん。

と、世人が正月について迷うて居る有樣をうつし出していましめられたが、これはいさゝか極端なるいひ樣なるが如く見えるけれども、世人の迷の夢をさますには、この位にいはなければならぬ。正月のかざりや、祝がわるいと申すではないけれども、只これればかりをなす爲めに、うか〳〵と騒立てゝ、表面ばかりのよそほひをせずに、

心の內に去年よりつもりにつもつて居る煩惱妄想の塵垢をサッパリと煤掃して、內外共に新しくなり、正しき信心を起して、げに芽出度境界になるやうに心がけるのが、何よりの肝要である。さてその正しい信心といふは、前に申した如く、吾等は本來佛心を具有して居るのであるから、この佛心を信じて疑はず、佛祖の敎の通りに行うてゆくのである。盤珪禪師の法語に、

僧問うて曰く、平生短氣にござりまして、師匠もひたもの意見を致されますれども、なほりませず。私も是れはあしき事じやと存じまして、なほさうと致しますれども、これが生付きでござりまして、直りませぬが、是は何と致しましたならば、なほりませうぞ。禪師の御示を受けまして、このたびなほしたう存じまする。若しなほりて國許へ歸りましたならば、師匠の前と申し、又私一生の面目と存じませう程に、お示しにあづかりたう存じまするといふ。禪師曰く、そなたはおもしろいものを生付かれたの。今も

此に短氣がござるか。あらば只今此へおだしやれ、なほしてしんじやうわいの。僧曰く、只今はござりませぬ。何とぞ致しました時には、ひよつと短氣が出ますする。禪師曰く、然らば短氣は生付きではござらぬ。何とぞした時の緣に依つて、ひよつとそなたが出かすわいの。何とぞした時も、我でかさぬに何處に短氣が有るものぞ。そなたが身の覺負故にむかふのものにとりあうて、我がおもはくを立たがつて、そなたが出かして置いて、それを生れつきといふは、なんだいを親にいひかくる大不孝の人といふもので

ござるわいの。人々皆親の生付けてたもつたは佛心一つで。餘のものはひとつも生付はしませぬわいの。しかるに一切に迷ふ我が身のひいき故に我が出かして、それを生付きと思ふは、おろかな事でござるわいの。我が出かさぬに短氣が何處にあらうぞいの。一切の迷も皆是れとおなじ事で、我がまよはぬに迷はありはしませぬわいの。それを皆あやまつて、生付きでもなき物を、我が欲

で迷ひ、氣ぐせで我が出かして居ながら、生付きとおもふゆゑに、一切事に付てまよはずに得居ませぬわいの。皆一佛心にかへて迷ひますぞいの。夫ほど迷がたつとければ、迷ひたうてもまよはぬが佛、迷はぬが悟で、外に佛になりやうはござらぬわいの。乃至、皆身ともに打まかせて、身ども次第にして、まづ三十日不生で居ならはしやれたらば、それから後には自ら居ともなうても、いやとも不生で居ねばならぬやうになるものでござつて、みごと不生で居らるゝものでござるわいの。平生佛心ひとつではたらき居るといふも生成佛心でござる所で、平生佛心ひとつではたらき居るといふもので、さうすれば今日の活佛でござらぬかいの。皆今生れかはつたやうにして、新しうなつて身共が示を聞かしやれ。手前に物があれば、耳にいらぬものじやほどに、今あらたに生れかはつたやうにして聞けば、始めて示を聞くやうなもので、內に物がなさに、一言の下でも聞き取つて、法成就しますわいの。

というてある。人々この示しの通りに、生れかはつた心になつて、それをいつまでも持つてゆくことが出來れば、この上もない重寶である。佛法といふものは、この功德がある。鈴木正三老人は「萬民德用」の中に、

佛語に、世間に入得すれば、出世あまりありと說き給へり。此の文は、世法に成佛するの理なり。然れば則ち世法則ち佛法也。華嚴に、佛法不異世間法、世間法不異佛法、如此說き給へり。若し世法に成佛する道理を用ゐずば、一切佛意をしらざる人也。願くは世法を則ち佛法になし給へかしとの念願なり。

というて、更に佛法の德用を十ケ條にわけて。

第一、佛法之寶、武勇に使ふ事
第二、佛法之寶、諸法度に使ふ事
第三、佛法之寶、五倫の道正しく使ふ事
第四、佛法之寶、諸藝能に使ふ事
第五、佛法之寶、渡世身すぎに使ふ事
第六、佛法之寶、善惡さはりなく使ふ事
第七、佛法之寶、身心安樂に使ふ事
第八、佛法之寶、萬事萬善に使ふ事
第九、佛法之寶、心病を治する事
第十、佛法之寶、極樂淨土に住する事

佛法といふものは、我慢勝手を遣うし、我見我欲を通すものと思ひ、これに依頼して不理の利益を得たいと思ひ、或は此世は勝手氣儘を働きながら、未來は安樂の淨土に生れたいといふやうな願ひをかけても、それが成就する筈ではない。正三老人のいはれた通りに用ゐてゆけば、この上もない重寶である。しかるに此に心つかず、この重寶を使ふことを誤つて、却つて迷の種とするは、いかにもなさけなきことであるから、どうぞこの佛法を正しく信じて、今世安穩後世安樂の境界になるやうに心がけることが何よりの肝要である。世

人の多くは、貧といへば、金銀珠玉ばかりとのみ思うて、ひたすら之を得んが爲めに汲々として、自分の身に備はつて居る黄金佛をたいなしにしていらるゝから、みだりに餘所見をせずに、自分の身をかへりみて、この重寶をシカと握つて、自由に使はれるやうにと思うて、新年早々から此の一節を演じた次第である。

三　苦と樂

何時の世にも、貧乏で衣食に困るところから苦難に堪へぬもの、或は不慮の災難に罹り、或は父母妻子に死別れ、その身を立てるこの出來ぬところよりして愁嘆し、或は不治の難病に罹り、自身の始末に窮して苦悶し、世を厭ひ身を悲しむ者はあるけれども、彼等は其の事情實に憐むべきものである。

近來世間に「煩悶」とか、「苦悶」とか、「厭世」とか、「悲觀」とかいふ聲が頻りに喧しくなつて、甚しきは之れが爲めに自殺する者が澤山になつたやうである。世が文明に進み、開化に赴くに隨つて、人類の災害、苦痛といふものは次第に減じて、幸福、安樂といふことが增して來る筈であるのに、今日の有樣は全く反對になつて居るのは、どういふ理由であらうか。自殺に就ても、古は刀物で咽喉を突き、腹を切り、或は縊死、投身するといふやうなことであつたが、近來

は鐵道往生、電車往生、モルヒネ往生、ピストル往生といふやうに、段々と新法が發明せられて來た。是れは文明世界の利器を惡用するといふもので、謂はゆる文明の弊害であるといふ者があるけれども、決してさうではあるまい。その理由は、斯樣の方法ばかりでなく、華殿の滿盛や、淺間山の噴火坑に飛び込み、或は耶馬溪の斷崖より身を投げるなどのことは、文明の利器を用ゐたのではなく、古から有つた塲處に身を投げたのであるが、しかし斯樣の處で身を投げるといふことは、古は餘り無かつたのが、近來になつて流行したことである。兎に角近來になつて煩悶、精神錯亂、自殺抔が年々多くなつて居ることは確實である。

昔は世間も開けず、人の智識も乏しく、富の程度も低くして貧乏であつたから、難儀、苦痛をする者が多いのは當然であるけれども、世の開明に赴くに隨ひ、人智も發達し、富の程度も高まつてゆくのであるから、斯樣な不幸は次第に減少してゆかねばならぬ筈である

のに、その反對になつて、近來の如く智識もあり、財產もあり、身體も强壯なものが、續々煩悶、苦痛の病氣に罹り、甚しきは自殺する者が澤山に現れ出るといふは、どういふ理由であらうか。

此等の疑問に對して種々の說をなす者がある。或は個人主義といふものが、外國から傳へられて、それが餘り極端に重んせられた結果、人々皆我儘を通さうとするからであるといひ、或は人間の快樂は、衣食住の充實、即ち美食、美衣、美宅等が思ふまゝに得られゝば、それで滿足が出來ると思ふ誤謬からであるといひ、或は智識は人間第一の寶である、之れさへあれば世の快樂は心の儘に得られると思ふけれども、人間は智識ばかりでは立たぬ、情感、意志も共に發達し、謂はゆる智、情、意が平等に圓滿に發達せなければ、眞正の快樂を得ることは出來ぬといふことを知らぬからであるといひ、或は生存競爭が烈しくなつたからたといひ、その外種種の說明をする者があるが、是等の說明も各々一理あるけれども、それは一種の學

說として指いて、私の考へでは、苦とはドンナもの、即ち苦樂の眞相を知らぬから起ることであると思ふ。

一　三苦

印度の婆羅門の一派では三苦といふことを說く。第一は內苦。是れは身內の苦といふことで、飢渴等をいふ。第二は外苦。是れは身外の苦といふことで、虎狼等の人を殘害することをいふ。第三は天苦、是れ天然の苦といふことで、風雨霜雪等より起る寒熱などをいふ。印度人が斯樣なことを人間の苦痛として居るのは、全く智識の足りないから起ることで、固より論ずるに足らずとして措いて、佛敎に於いても小乘敎では、

二　四苦八苦

といふことを說く。四苦とは、生、老、病、死をいふ。此の中で病だけは養生の如何によつて罹らぬやうにすることは出來やうが、その餘の三は如何にしても免れることが出來ぬ。それを强ひて免れやうとするは愚なことである。次に愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五陰盛苦といふがある。愛別離苦とは、父母妻子等の親愛の間柄な者には、却て別離することがあり易い、是れは苦痛なことである。怨憎會苦とは、自分が憎いと思ひ、怨んで居るやうな者には却て會ひ易いものである、是れも苦痛なことである。求不得苦とは、人の慾念は無限であるから、何ほど求めても是れで滿足といふことは得難いものである。その求めることが得られぬを苦痛とすること。五陰盛苦とは、少しく面倒であるが、ツマリ獸慾の盛にして制し難いことをいふたものである。生老病死の四苦に、此の愛別離苦等の四を加へて八苦と謂ふのである。しかし是れは凡夫が世間の常相に執着するから、その執着を除く爲めに說いたものであつて、斯る事をスカリと無いやうに致すことは決して出來るものではない。若し是等を苦痛として之を除かうとするならば、老子が「我れに大患あり、此の身有るが爲めなり」といふた如く、この身體の存在するといふ

ことが、抑も苦痛の根本であるから、先づこの身體を亡くするより外は無いことになる。この身體を亡くする位ならば、苦樂を論ずる必要もなく、苦を離れて樂を得るといふ教も無用である。是等も苦樂の眞相を了解した說き方ではない。しからば樂といふはドンナものであるか。

何よりも寐たほど樂なことはない

浮世の馬鹿が起きてはたらく

といふ句があるが、是れも世間の凡夫がアクセクとして利慾を追ひ求むるのを警めたものと見れば可いが、若し眞に寢てばかり居るのが樂しみであるとするならば、大變な間違である。毎日朝から晩まで寢通しに寢て居つたならば、遂に難儀に堪へられぬやうになるから、却て、

何よりも寐たほどつらひことはない

と叫び出すやうになる。

樂しみは後に杜前に酒といふ句は、酒飲みの我儘者が吐いたことで、下戸の方では、少しも感じが無い。むしろ、

花より團子

といふ方を眞理とするであらう。

樂しみは夕顏棚の下納涼といふも、一面の眞味を道うてあるが、消極的の一方であつて充分といへない。

三　孟子の三樂

といふのは、

第一　父母俱に在まして兄弟故なきこと

第二　己れの心の中において、仰いで天に愧ぢず、俯して地に愧ぢざるの覺悟あること

第三　天下の英才を得て之を敎育すること

であるが、是れは亞聖とか大賢といはるゝ人だけあつて衆人に立ち超えた處がある。

四　閻齋の三樂

といふのは、

第一　男子に生れたること
第二　太平の代に生れたること
第三　下賤の家に生れたること

であるが、山崎閻齋は、德川氏三百年間に於て、最も繁盛なる元祿年間に生れ、而も大名、公卿等の貴顯の家に生れたらば、侍女侍臣の爲めに育てられ、身體も惰弱、精神も遲鈍になつて、終身無藝無能で醉生夢死して仕舞つたであらうが、貧乏な一商賈の家に生れたので、奮發勉强した爲めに大學者となつたのであるから、斯樣にいふたのであらう。

五　苦樂の根源

しかし、孟子にせよ、閻齋にせよ、各自分の立場から樂みを立てゝ居るので、彼等自身に取つては各自得して居たであらうが、天下の人は悉くかういふやうになるといふことは難いから、天下一般に通ずる樂といふことは出來ぬ。イヤ是等は未だ苦樂といふものを物體に立てゝ、苦樂といふ實際の物體があるやうに見ての說であるが、元來苦樂といふ實物實體は無いものである。その證據には苦樂がその人により、その時により、其の處によつて異なるではないか。その人、時、處によつて異なるのは、苦樂に實體の無い證據である。まして苦樂にかぎらず、大小、長短、善惡、吉凶、禍福、得失、利害等のことは皆相對的というて、一方ばかり有るものではなく、大は小に對してあり、善は惡に對して立ち、樂は苦に對して存するものであるから、苦が無ければ樂といふものも無いのである。例へば、朝寒い時に早く起きて冷水で身體を磨擦し、庭でも掃除するのは、蒲團の中に埋まつて居るより苦痛である。けれどもそれを遣つて然

して後に朝飯を喫すれば非常にウマヒ、是れ即ち苦ありて樂ありである。しからば苦を除いて外に樂といふものは無い。イヤこの苦樂といふことも畢竟自體は無いので、只各自身に苦と感じ樂と思ふまでのことである。彼の、

思うて通へば千里も一里會はで返れば又千里
我がものと思へば輕し傘の雪

などの俗謠一首でも、よくこの苦樂の狀態を示して居るではないか。

六　善惡の論

二宮尊德翁の夜話に、

善惡の論甚だむづかし。本來を論ずれば善も無く惡も無し。善と云うて分つ故に惡と云ふ物出來るなり。元人身の私より成れる物にて、人道上の物なり。故に人なければ善惡無し。人あり後に善惡はあるなり。故に人は荒蕪を開くを善とし。田畑を荒すを惡となせども、猪鹿の方にては、開拓を惡とし、荒す事を善とするなり。盜仲間にては、盜を善とし、是を制する者を惡とするならん。然れば如何なる物是れ善ぞ。如何なる物是れ惡ぞ。此の理明辨し難し。此の理の尤も見易きは遠近なり。遠近と云ふも、善惡と云ふも、理は同じ。譬へば杭二本を作り、一本を遠しと記し、一本には近しと記し。此の二本を渡して、此の杭を汝が身より遠き所と、近き所と、二所に立つべしと云ひ付ける時、速に分るなり。予が歌に「見渡せば遠き近きはなかりけりおのれ〳〵が住處にぞある」と。此の歌「善きもあしきもなかりけり」といふ時は、人身に切なる故に分らず。遠近は人身に切ならざるが故によく分るなり。工事に曲直を望むも、餘り目に近きか過る時は見えぬ物なり。さりとて遠過ぎても又眼力及ばぬ物なり。古語に遠山木なし、遠海波無しといへるが如し。故に我身に疎き遠近に移して諭すなり。夫れ遠近は己が居處先づ定りて後に遠近あるなり。居處定らざれば遠近必ず無し。大阪遠しといはゞ、

べし。世法、盜を惡とすれども、

關東の人なるべし。關東遠しといはゝ、上方の人なるべし。禍福吉凶是非得失皆是れに同じ。禍福も一つなり。善惡も一つなり。得失も一つなり。元一つなる物の半を善とすれば、其の半は必ず惡なり。然るに其の半に惡なからむ事を願ふ、是れ成り難き事を願ふなり。夫れ人生れたるを喜べば、死の悲しみは隨つて離れず、咲たる花の必ず散るに同じ。生じたる草の必ず枯るゝにおなじ。涅槃經に此の譬あり。或人の家に容貌美麗端正なる婦人入り來る。婦人答へて曰く、我れは功德天なり。主人如何なる御人ぞと問ふ。婦人曰く、我れに隨從の婦一人あり、必ず跡より來る、是れをも誰すべしと。主人諾す。時に一女來る、容貌醜陋にして至て見惡し。如何なる人ぞと問ふ。此の女答へて曰く、我は黑闇天なり。我が至る處、不祥災害ある無限なりと。主人是を聞き大に怒り、速に歸り去れといへば、此の女曰く、前に來れる功德天は我が姉なり。暫

くも離ること能はず。姉を止めば我れをも止め、我れをいたさば姉をも出せと云ふ。主人暫く考へて、二人ともに出しやりければ、二人連れ立て出で行きけりと云ふ事ありと聞けり。是れ生者必滅、會者定離の譬なり。死生は勿論、禍福吉凶、損益得失皆同じ。元、禍と福と同體にして一圓なり。吉と凶と兄弟にして一圓なり。百事皆同じ。只今も其の通り、通勤する時は、近くてよいといひ、火事だと云ふと、遠くてよかりしと云ふなり。是れを以て知るべし、

と云うてあるが、高尙の道理を卑近の譬を以て、何人にも合點の出來るやうに說いてある。此の中に苦樂といふ語は無いけれども、禍福吉凶、損益利益と同じく相對のものは、皆この道理に漏れぬから、苦樂のことも是の話にて分る筈である。この中で「然るに其の半に惡なからむ事を願ふ、是れ成り難き事を願ふなり」の一語は、實に能く古今東西凡夫の情を穿つて居る。翁は更に、

七　苦樂の辨

に就て左の如く言うて居られる。

茶師利休が歌に「寒熱の地獄に通ふ茶柄杓も心なければ苦しみもなしと」云へり。此の歌未だ盡くさず。如何となれば、其の心無心を得ぶといへども、人は無心なるのみにては、國家の用をなさず。夫れ心とは我心の事なり。只我を去りしのみにては未だ足らず。我を去て其の上に一心を決定し、毫末も心を動さゝるに到らざれば得むに足らず。故に我れ常に云ふ、此の歌未だ盡さずと。今試に詠み直さば「茶柄杓の様に心を定めなば湯水の中も苦しみは無し」とせば可ならんか。夫れ人は一心を決定し動さゝるを尊むなり。夫れ富貴安逸を好み、貧賤勤勞を厭ふは凡情の常なり。聖嫁たる者は、夏、火宅に居るが如く、冬、寒野に出づるが如く、又寶家に來る時は、夏、氷室に入るが如く、冬、火宅に寄るが如き思ひある物なり。此の時其の身に天命ある事を

辨へ、天命の安ずべき理を悟り、養家は我家なりと決定して、心を動さゝる事、不動尊の像の如く、猛火背を焼くといへども、動かじと決定し、養家の爲めに心力を盡くす時は、實家へ來らんと欲するとも其の暇あらざるべし。斯の如く勵む時は、心力勤勞も苦にはならぬ物なり。是れ只我を去ると、一心の覺悟決定の徹底にあり。夫れ農夫の暑塞に田畑を耕し、風雨に山野を奔走する、車力の車を押し、米搗きの米を搗くが如き、他の惹眼を以て見る時は、其の勤苦云ふべからず、氣の毒の至りなりといへども、其の身に於ては、乘て決定して、勞働に安んずるなれば、苦には思はぬなり。武士の戰場に出で、野に臥し山に伏し、君の馬前に命を捨つるも、一心決定すればこそ出來るなれ。されば天命を辨へ、天命に安んじ、我を去て一心決定して動かさゝるを尊しとす。

と、是れ亦苦を知つて苦に動かされねば、その苦自ら滅し、苦却て轉じて樂となるの理を示したものである。今日煩悶とか、苦悶とか

騒ぎ廻る輩は、畢竟この道理を知らぬからのことである。勿論世間の有様が一變した爲めに、生活の樣子に變化を來したより、種々の煩悶や苦惱が起るでもあらうが、大體は此の苦樂の眞相が分からぬからのことである。卽ち苦樂は元來一つもので、その半が苦なれば、其の半が樂であることを知らず、苦を除いて樂だけを取らうとするからの騒ぎである。更に譬を以て說いてみれば、火は物を燒き、水は人を溺らすものであるから、この方からいへば、火も水も人間には害となる。しかし火は物を燒く效用があるから、その熱で物を煮ることも出來る。水は人を溺らす力があるから、その氣で物を濕すことも出來る。湖や海は水波があつて陸地と異なつて居るから、魚類が生じ、又船舶の便利を得る。電氣は人に觸れゝば直に死ぬる位恐しいものであるが、それだから電信も、電車も、電燈も、電話も出來て、人間に便利を與へるではないか。天地の萬物皆かくの通りで、一利一害は免れないものであるが、その害を去つて利を取ると

いふのは、人間の働きで、人間の働き如何によつて利害が分れるのである。さうして其の働きとは、只我が一念に外ならぬのであるから、苦を離れて樂を得やうとするには、各自修養を致さなければならぬ。

八　苦樂解脫の法

その修養の仕方に就ても種々の說もあらうが、我が宗では坐禪を第一と致してある。坐禪といへば、僧侶の眞似をすることと思うてはならぬ。坐禪は何人にも出來る。鐵牛禪師は、

工夫不必擇閑忙　資劍提來慈面揚。
百萬魔軍都殺盡　淸平世界獨稱王。

といふ偈を作つて居られる。是れは坐禪工夫をするには、閑暇と多忙とに拘らず、自己の智劍を慈向に揮りかざし、日夜胸中に浮ぶところの種々無量の煩惱妄想卽ち我慢、身嵩負、得手、勝手の分別を殺し盡くして仕舞へ。それさへ殺し盡せば、我れを苦しめるものは

一人もないから、天下太平、自由安樂の身となるといふ旨意である。しかるに我れを苦しめる者が、我が身の外に在ると思ふのは、是れ自分の顚倒せる妄想といふものである。苦樂は畢竟自己の心で分別するといふが、その自己の心といふものが何處に在る。頭のギリギリから足のツマサキまで、能く〳〵吟味してみるがよい。斷じて是れが心といふべき實體は無い。しかるにその心が實に在ると思ふのは、それこそ我れを苦しめるところの惡魔である。この惡魔を工夫の力で降伏すべきである。釋尊の降魔成道といふのも即ち是れである。

九 解脫の例

昔し支那禪宗の四祖大醫禪師が、三祖僧璨大師に謁して、大慈大悲を以て、私に解脫の法門を授けて下さいと願はれた。解脫とはトケ、ヌケルといふことで、種種の苦しみの爲めに心身がカラメラレて居るから、それをトキ、ハナレて自由安樂の境界になることである。スルト僧璨大師は、誰れが汝を縛つたぞと云はれた。ソコデ大醫禪師は、誰れも私を縛つた者はありませぬと答へられたから、僧璨大師は、縛つた者が無いならば、別に解脫を求むる必要はあるまいと云はれたが、この一語の下に大醫禪師は豁然として大悟せられた。斯く一語の下に大悟して、大安樂の境界を得られたといふは、平素一生懸命に坐禪工夫せられた結果であつて、一朝一夕のことではない。たとひ一應の道理は合點が出來ても、眞實不動の境界に至るのは容易なことではないから、日夜怠らずに精進工夫を望む次第である。

四　順境と逆境

（一）

三祖僧璨大師の『信心銘』に、

至道難無し、唯だ揀擇を嫌ふ。但だ憎愛すること莫れ、洞然とし
て明白なり。毫釐も差あれば、天地懸に隔る。現前を得んと欲せ
ば、順逆を存すること莫れ。

とある。元來天地の大道といふものは、まことに寛廣平坦なもので、
決して難易は無いものであるが、それを難儀なものと思うて、煩悶
懊惱するのは、ツマリ自分が憎愛揀擇するからである。唐の白樂天
が、

行路難。不レ在レ水不レ在レ山。唯在二人情反覆間一。

と歌うたのも、又古歌に、

世の中を渡りつくして今ぞ知る

阿波の鳴門に波風はなし

と詠んだのも、只一面の觀察である。傳大士は、『行路易』といふ
古詩を作つて居られる。さすれば世間といふものは、渡り惡いとキ
マツタものでもなく、又渡り惡くないとキマツタものでもなく、只
銘々自分のやり方一つである。それ故に三祖大師は又、

大道體廣く、難無く易無し。

と示されてある。しかるに世間に、ヤレ順境じやソレ逆境じやとい
うて、笑つたり泣いたりして騷動しぬいて、遂には共に七顚八倒し
て悶死するものが頗る多いが、これは順境とか逆境とかいふものが、
自身の外に在ると思うて居るからの誤りである。凡夫は自身の外に
在ると思うて居るけれども、決してさうではない。たゞ各自が考か
ら順境逆境といふ區別を立てゝ、それを愛し又は憎んで騷動するので
ある。例へば、峨々として雲際に聳ゆる懸崖絶壁でも、樵夫は重い
木石を背負うて上り下りをする。又嶙々として山の如き大濤がよせ

くる大海でも、漁夫は平氣で小舟で往來する。これ等を他より見れば、氣も心も消え入るほど恐しく思はれるけれども、樵夫や漁夫は何とも思はぬ。イヤ初めから思はぬではないが、幼少の時から次第に習うて、かやうに自在に往來するやうになるのである。樵夫は山に慣れて居るから、山ほど恐しいものはなからうが、漁夫は海に慣れて居るから、山ほど辛いものはあるまい。されば苦と樂とは、山や海ではなくて、その人々によつて異なるといふことが知れる。

ツマリ世の中に順境逆境といふものは無いので、各自が順逆の區別を立てるから、順境逆境があるのであるといふことを悟れば、如何なる逆境に遇うても、自由自在に取り捌いてゆくことが出來る。しかしこの悟を開くことは文字言語の說明では出來ぬ。之に反して書物を讀まなくても、日々の事物に就いて、一々注意してやつてゆけば、自然に悟入が出來る。しかし最初から順境に居て衣食住等に不自由を感せず、その外人事の困難に出遇はず、すべての刺撃を受け

ぬ者は、其順境に在るといふことを知らぬから、自ら不足を感じ、更に飽くことなき慾望を逞しうせんとするので、却て取り返しのつかぬ災禍に陷ることがある。それであるから眞の順境に達せうとするには、是非一たび逆境に遇うて、充分に之れと奮闘して、遂に之れに打ち勝つか、又は自ら求めて非常の刻苦を嘗め、身心を鍛錬して、心を不動の境界に置くやうにならなければならぬ。即ち順逆一如の境界に達しなくてはならぬ。

(二)

明治維新第一の豪傑と稱せらるゝ西郷南洲と相對すべき、幕府の豪傑は海舟勝安房である。西郷は勤王黨で、勝は佐幕黨であるから、西郷は順境で、勝は逆境であつたやうに思はれるが、ソレハ餘程後の事であつて、最初は西郷も萬死の間に出入して、非常の逆境に在つたものである。彼の月照と相抱ひて薩摩潟に投じた時の如きは、その極度に達した時であつた。かゝる非常の逆境を通つて來からこ

そ、後に王政維新の大業を成し遂げることが出來たのであれ、決して最初から濡手で粟を握み取つたのではない。近日『海舟言行錄』を讀んで居るトコロが、なか〳〵有益な事が澤山あるその中に、海舟の修養談がある。

（三）

老翁（勝海舟自らいふ）なんかは、始終逆境の立ちづめだから、なか〳〵に心抱力が錬れたよ。人の股を潜るも、人から踏みつけらるゝも、何とも思やしない。蚊が頭を刺した程にも感じないよ。此三十年間は始終頭の踏み附けられ通しさ。人は時としては頭を踏まれようが、ジット心抱をする勇氣がなくてはならぬ。其れと云つて、蝦蟇が冬の間は默つて石の下に蟄伏する樣ではいけぬ。チャント世間よりも常に目を一段高く着けて居る。超脫の所なかる可らずだ。されば一時は衆愚囂々、如何なる誹謗に遇ひ、如何なる侮辱を受けても、チャント心を据へて始終自己の識見をし

て一着世間より高からしむる工夫さへ怠らずんば、遂には世間から負けてくる者よ。此の心抱あり、此の工夫あり、以て天下の大困難、大厄難に勝つことを得べしだ。世間の人々往々小困難、小厄難に遭遇して、周章狼狽其措置を失するに至るもの、皆此の識見の透徹なきが故なり。此の掛物の通りだ。「虛明自照不勞心」人一たび此の境に達せば、天下の事何物か能く靈臺の累とならん。と云つて居るが、

（四）

この鍛錬、この工夫は、決して一時に出來たのではなくて、積年修業の結果である。彼れの修業に就いては、かう云うて居る。

老翁は一體文字が大嫌ひだ。一つ修業した事はない。學問とても何もしない。只彼の四年間屛居の御蔭で、少々は學問が出來た。源氏物語や、種々の和文も、此の時に讀んだ。漢學も始めて此の時にした。到頭二十一史も讀み透したよ。しかしほんの獨學で、始終康熙字典と首引をしたから、今に

音讀すら眞でない。よい加減に偏や作を見て遣附るんだ。本當に修業したのは劍術ばかりだ。一體老爺の家が劍術の家筋であるからとて、老爺の親父も骨折つて修業させんと、當時劍術の師範をして居た島田虎之助と云ふ人に就けた。この人は世間なみの撃劍家とは異ふ所があつた。島田の云ふには、今時皆がやつて居る劍術は、ほんのかたばかりだ。折角の事に、足下はほんとうの劍術をおやりなされと、是れより島田の塾につめて、自から薪水の勞を取つて、修業した。寒中になると、島田の指圖に從ひ、毎日稽古がすむと、夕方より稽古衣一枚で、王子權現に行て夜稽古をした。何時も先づ拜殿の礎石に腰をかけ、瞑目沈思、心膽の錬磨をなし、更に起つて木劍をすぶりし、更に元の礎石に腰をかけ、再び心膽の錬磨にかゝり、それより復た起つて木劍をすぶりし、此の如きもの數回、遂に天明に至る。夫れより直に歸つて朝稽古をなし、復た夕方より王子權現に出かけ、一日も怠らなかつた。始めは深更只一人、森々として樹

木茂れる社内に立ち居ることゝて、何となく心氣怯し、寒風木枝を拂ふ聲凄しく聞へ、覺えず毛髮を竪て、今にも大木頭上に落ちかゝり來らんかの如く思はれしが、修養の積むに從ひ、何とも感じなくなり、遂には四面寂寥の中に在つて、ひう〳〵と木枝を掠め來る寒風の聲を聞くことが、何となく一種の趣を添へ來る樣になつた。時に二三人の同門生が來ることもありしが、寒さと眠さに辟易し、何時も半ばより近傍の民家を叩き起して寢るが常なりしも、老爺は馬鹿正直にも、さることは一度もなさゞりし。此の修業の効は忽ち瓦解の前後に顯はれ、あの樣な艱難辛苦に堪へ得て、少しもひるまなかつたは、全く此の修業の御陰である。ほんに此の時分には寒中足袋も履かず、袷一枚で平氣だつたよ。暑さ寒さなど云ふ事は、どんな事やら、ほとんど知らなかつた。ほんに身體は鐵同樣であつた。今に此の年になつて、身體も達者で、足下も確かに、根氣も丈夫なのは、全く此の修業の餘慶だよ。彼の島田と云ふ先生が、劍術の奥

意を極むるには、先づ禪學を始めよと勸めた。それでたしか十九か二十の時であつた、牛島の廣德寺と云ふ寺に行つて、禪學を始めた。大勢の坊主と禪堂に坐禪を組で居ると、和尙が棒を持ち來り、不意に坐禪して居る者の肩を叩く、すると片端から仰向に倒れる。なに皆が坐禪しても、錢の事やら、女の事やら、甘い物の事やら、色々の事を考へて、心が何處にか飛んでしまつて居る、そこを叩かれるから、吃驚してころげるのだ。老爺なんかも始めは此のヒックリ返る連中であつたが、段々修業が積むと、少しも驚かなくなつて、例の如く肩を叩かれても、只僅か目を開いて視る位の所に達したからして、殆ど四ケ年間眞面目に修業した。此の坐禪の功と、劍術の功が、老爺の土臺となつて、後年大層爲めになつた。瓦解の時分に萬死の境を出入して、遂に一生を全うしたのは、全く此の二つの功であつた。あの時分に澤山刺客やなんかにひやかされたが、何時も手取りにした。此の勇氣と膽力は、畢竟此の二つに養はれたのだ。危難

に際會し、逃れられぬ場合と見たら、先づ身命を捨てゝかかつた。そして不思議にも一度も死なゝかつた。こゝに精神上の一大作用が存在するのだ。人一たび勝たんとするに急なる、忽ち頭熱し胸跳り、措置却て顚倒し、進退度を失するの患を免るゝ能はず。若し或は退いて防禦の地位に立たんと欲す、忽ち退縮の氣を生じ來つて。相手に乘せらるゝ事大小となく此の規則に支配せらるゝのだ。老爺は此の人間精神上の作用を悟了し、何時も先づ勝敗の念を度外に置き、虛心坦懷、事變に處した。それで小にしては瓦解前後の難局に處して、綽々として餘地を有ちたりき。大にしては是れ畢竟劍術と禪學の二道より得來りし賜であつた、云々といふてある。

(五)

海舟の此の修養があつて、始めて逆境に立つて自在の働きをすることが出來る。海舟は逆境に立つて、自分の働きで、之を轉じて順

境となしたのであるが、順境に在る者は、極めて樂なものかといふに、決してさうではない。世人多くは逆境は苦痛で、順境は安樂と思うて居るけれども、これは全く誤解である。逆境に在る中は、氣も張つて居り、身體も多忙である故に健康であるが、順境に在る時は、氣も弛み身體も我儘が出來るので、自然に虚弱になる。それのみならず種々の誘惑が集つて來るから、自らその誘惑に陷つて復び立つことが出來ぬやうになり易い。それであるから順境の中に在る時は、逆境の時よりも更に一層の注意を要するわけである。

（六）

福島縣二本松の阿部井磐根といふ老傑は、曾て衆議院全院委員長になつて、名聲嘖々たる人である。余は十八九年以前に、房州の根本の養生館で、二週間計り同室したことがあつて、種々の話を聞いた。初對面の時に、貴下は委員長の阿部井さんでありますかと問へば、私は磐根でありま

すと云はれるから、それは何故であります かといへば、衆議院といふものは、國民の代議士の出る所でありますから、如何にも堂々たる天下の役所でありますが、その中に居る代議士といふものは、陰謀、詐僞、奸計等あらゆる惡徳を行ふもので、實に不潔極まつて居ります。私もその惡徳を働く一人であるから、人に思はれますと、總身に冷汗が出ます。つい先達而も鈴木某が私の旅館に來て、先生の御國の庭園にある梅の老樹を賣拂なさらぬかといふから、あんなものを買ふ者があるなら、拂つてもよいといへば、大東義徹さんが五千圓で買ふといふことであります。しかし代金は今御渡しするが、梅の老樹は三年間ばかり其儘にして預つて置いて貰ひたいといふから、私は、そんな事があるものか。全體品物を見ずに買ふといふからして怪しい。ことに如何に珍品にせよ、多寡が梅の樹一本を五千圓で買ふのが怪しい。まして代金は今渡すが、梅の樹はその儘で三年間預つて置いて呉れといふのは益す〳〵

怪しい。貴下は歸つて大東にそういへ、阿部井の老骨は痩せても枯れても、未だ五千や壹萬の金では賣らぬと、一喝して追ひかへしてやりました。かやうな有樣でありますから、少しも油斷がなりませぬ。朋友だとか、知己だとかいうて居ても、苟も自己の利益になるとなれば、忽ち排擠もすれば、又買收もするのでありますから、餘程シカツリと致して居らねばならぬ、直に彼等に逆られて仕舞ますと、慨嗟嘆して居られた。

（七）

阿部井翁は、代議士がさまでに嫌ひでありながら、何故その代議士になつて居られるかと尋ねたら、自分は小身微祿の家に生れ、幼年から非常に艱苦を嘗めて來たが、三十歳の頃、誤まつて鄕里より推されて縣會議員となり、議長にもなりして、今日まで公共の職務に身を委ねて來ました。今回も老朽の身で、何事も出來ないからと申して辭しましたが、強ゐて推されて代議士になりましたのも、是

れまでの經歷上已むを得ず成つたのでありますが、さて衆議院に出て見れば、前に申す通りでありまして、丸で御話になりませぬ。何時でも純良の人ばかり居るものではありませぬが、さりとて今日の如く、惡いことを巧みに働く者が勝ちといふやうな世の中は實に危險なことであります。彼の星亭などといふ人は、實に豪傑ではあるが、あゝいふ遣り方では、政治社會を腐敗せしめ、茶毒することの甚しいわけでありますと、語つて居られたが、其後星氏は衆議院議長となり、勢力を得るに隨つて益す暴威をふるうて汚行を逞うした爲めに、第五次議會の時に至つて、阿部井翁の發言によつて、議長不信認案の提出に遇ひ、遂に議長を辭せなければならぬやうになつた。此時勝海舟は、

山がつと云ひなくだしそ老ひぬれど

阿部井の翁心雄々しき

といふ、一首を贈られた。阿部井翁は又嘗て福島縣會議長であつた

頃、折田平內氏が縣知事になつて赴任した時、宴會の席で、折田氏が翁に向ひ、是れから御懇意に願ひますと挨拶せられた。すると、翁は、イヤ貴下とは懇意になることは出來ませぬと云つたので、折田氏は、それは何故でありますか、公私の別がありますから、役は反對であつても、私交は懇意に出來ぬことはありますまいと云はれると、翁は、イヤ西洋諸國では公私の區別が判然と立つて居るさうであるが、日本ことに我が福島縣の如き邊地では、到底出來兼ねます。それ故貴下と私が公職に在る間は、懇意にすることは固く謝絶すると云ひ放つたそうである。

時に、知事が突然發言した。スルト翁は背後をかへりみて、大喝一聲、「默れ」と云つたので、滿場迅雷の落ちたやうに驚いたが、給仕の者は、之を見て飛び出し、ブル〳〵慄いながら今議長さんと知事さんと喧嘩が始まつたと云ふたので、一時大騷動をしたそうであるが、何故にアンナ言を放つたかと翁に尋ねた者があつたので、別に

何の考も爲いが、議場は議長の城廓である。知事は愚か、たとひ大臣でも誰れでも、議長の許可を待たずして發言するものは、皆一言に之を制止するのが當然である。只あの時は騷がしかつたから特に聲を大きくしたままであると云はれたそうだ。其後折田氏が警視總監に轉任せられる事になつて、送別の宴會があつた時、翁は一首の和歌を短冊に書いたのを折田氏に贈り、御在職中は誠に失禮をしましたが、今日から何卒御懇意に願ひますと云はれたので、折田氏も翁の志を感じ、貴下が是迄ア、いふ風にしてくだされたればこそ、私は無事に勤められて、今日皆樣から送別をして貰ふことが出來たのでありますから、貴下の厚意は感謝に堪へません。何卒今後は懇意に願ひますと、互に手を把りかはして袂を結び、その後終生親密の袂を全うせられたといふ。

（八）

阿部井翁は、溫厚の君子で、その言語動作も極めて謹嚴である。

その妻女に與へる書簡でも、毛筆の上に卷紙を展べ、懸腕直筆で、一點一畫も苟且にせぬ書方で認め、更に初めより讀んで見て、それから封じて送り出すといふ風であるから、その外は推して知るべきであるが、自ら守ること極めて清廉潔白であるから、事に臨んで勇氣のあることは非常なもので、緜知事を一喝の下に屏息せしめ、流石剛愎執拗の星亨を一言の下に議長を辭せしむるほどである。是が大抵な者には出來ぬ。翁は淸廉潔白で、謂はゆる「威武も屈する能はず、富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はざる」底の氣節がある からである。近頃の議員は、砂糖を嘗めさせられ、醬油を飮ませられて、直にコロ〳〵倒れるから、首に繩をつけられて、鐵窓の下に呻吟する者が多いが、是れは逆境に堪へ得ぬのではなく、順境に立つて守る所が無いからである。彼等は代議士になる前には、どうかして成りたいとモガキ騷いで、ヤットのことで成つたのであるから、成つたならば、既に逆境より順境に進んだのである。しかるに彼等

は順境を守ることを知らぬから、その順境が忽ち轉じて逆境となり、非常な苦痛を受け、百世拭ふことの出來ぬ汚辱を蒙らねばならぬ、實に氣毒千萬なことであるが、皆自業自得であるから致方が無い。

（九）

今日この頃のごとき金石を鎔かすやうな炎天に、人力車に乘つてゆけば、車夫は流汗淋漓として、如何にも難儀そうに見ゆるので、何んと苦しいことであらうといたはつて云へば、イヤ一生懸命になつて引いて居れば、引いて居る間はさまで苦しいとも思ひません、却つて家の內にゴロ〳〵と臥て居る時の方が、熱いものであります。それに私共は未だ樂なものと思ひます。汽車や汽船の火夫は、百度近い處に居て、石炭を燒いて居ます。又砲兵工廠の職工や、鎔山炭山の坑夫の話を聞けば、私共の仕事は、未だ〳〵樂なものだと思うて居ますといふ。何たる自得の言ぞ。順逆苦樂は相對的である。即ち比較より起るものである。比較は各自の分別より起る。しからば

順逆は前境ではなくして、自己に在ることが知れる。嗚呼、この一車夫、學問知識があるでは無いが、その自ら處する所、人に對して言ふ所は、實に眞理であつて、佛祖聖賢の語と相合して居る。余も先月末に大磯に開かれに講習會に赴いたが、一日二日經ると、暑さも東京と同じ樣に感ぜられ、熱い〳〵と汗を拭き〳〵、講演を了つて東京に歸つて來れば、以前にまして熱さが烈しいやうに思はれた。そこでコレハ熱い〳〵と諸方をうろたべ廻るにほ及ばぬ。病人ならば別のこと、無病の者は矢張その住處に居て、一生懸命に仕事をずるがよろしい。一日の仕事を了てから、淋汗をして浴衣に着換え、樣先に出て涼風明月に對した心地は、何とも言ひ得ぬ。中納言敦忠の、

あひみての後の心にくらぶれば
昔しはものを思はざりけり

の歌は、おもふ人に一度おひまして、逢ぬさきの心とくらべてみれ

ば、逢ぬさきは物おもひが無かつたに、逢うてから後は物おもひが絶えぬといふ意を詠んだ戀の歌であるが、只戀ばかりでは無い。人間萬事みな是の通りで、地間廣しといへども、到る處皆逆境である。それ故に初めに掲げた、三祖大師の御詞の「順逆を存することなかれ」といことを徹底悟りぬくのが肝要である。若しこの順逆の心は畢竟無自性不可得と悟つて、自ら存することさへなければ、その儘至道現前で、順逆の二境はおれどもありつぶれであるから、乾坤大地横行濶歩自由自在である。しかしがやうな境界に至るといふは到底理論では駄目であるから、日が夜を、喫茶喫飯、語默動靜の間に於いて、暫時もさしおかず、一事一物に就いて修養してゆかねばならぬ。

居逆境中。周身皆鍼砭藥石。砥節礪行而不覺。
處順境內。滿前盡兵及戈矛。銷膏靡骨而不知。

（洪自誠）

五　意志の鍛錬

（一）

佛教は佛になる道を說いて、一切衆生をして悉く佛になろしめるのが目的であるが、人として人たる道を履み行うてゆくことの出來ないやうなことでは、如何なる事があつても、決して佛になることは出來ぬ。それゆえに佛にならうとするには、その前に先づ完全な人になるやうに心掛るのが肝要である。しからば如何にすれば完全な人になれるかといふに、それは種々の說き方もあらふけれども、人には、智識、情感、意志の三つがあつて、熱い寒い、苦しい樂しいといふやうなことを知るのは情感で、善い惡い、損得利害等のことを分別するのは智で、その智識で分別したことをシカと決定して、その分別した通りに實行するやうに致すものが意志である。例へば、この節の如き寒い朝、早く起きて冷水摩擦をし、室内を明け放ち、

内外を掃除し、神佛へ禮拜祈禱などするのは、なか〳〵苦しいことであるけれども、之をすれば身體も清淨になり、精神も爽快になり、一日活潑に仕事することが出來るのであるから、誰れも斯樣に致せば、衛生にも善いといふことは知つて居る、知つて居ながらイザとなればタイギであるから、遂に起きることをせずして、蓐の中にグズ〳〵して朝日の三間も上る頃まで寢て仕舞ふやうなことがある。是れは智識では早起がよいと合點して居ながら、意志が弱い爲めに實行することが出來ぬのである。それであるから如何ほど智識があつて、妙案を立てゝも、意志が弱くては實行が出來ぬので、智識が無いと同樣である。さればといつて自己の意志ばかりを無上のものと思ひ、それを實行すれば、その結果が善いか惡いか、果して利であるか害であるかといふことを考へずして、意志の通に行へば、是れ亦飛んだ禍に陷ることがある。是れは多く感情が激發して、非常に嬉しいとか、非常に怒しいとかいふ場合に、前後の損得利害を考

べず、即ち智識の分別を俟たずして、直ちに情感のまゝに意志を決定して實行するから起ることである。さればといつて又寒くもなく熱くもなく、痛くも痒くもないといふならば、本石同様であつて、人でないばかりでなく、動物でも無い、人は高等動物であるから、情感が無いわけはないから、痛痒苦樂を感ずるのは當然であるけれども、それを智識で利害損得を考べて、その適度を計つて行ふのが、人の人たる所以である。ツマリ情感、智識、意志の三つは、鼎の三本足のやうなもので、一も缺けては完全の用をなさぬ。それゆえ完全の人となるには、必ずこの智、情、意の三つの完全の發達を計らねばならぬ。しかるに物は兎角偏倚し易いもので、完全圓滿に發達することは難いものである。

（三）

封建時代は、學問といふは只智識を研くばかりではなく、意志の鍛錬といふことに重きを措いたものであるから、單に才智のみ勝れ

た者は餘り尊重せず、たとひ才智は鈍くても、實貞にして意志の堅固な者を尚んだものである。

せず、間々途方も無い事を仕出來し、或は頑固一徹にして、自由の働の出來ぬ者も多く有つたのが、

鷹は飢ゑても穗を摘まず
渴しても盜泉の水を飮まず
武士は喰はねど高楊枝

といふやうな俚言が、武士の修身の基本となつて居たので、彼等は隨分殺伐な氣性を有つて居て、時としては下位にある農工商の輩に對して殘酷な振舞をなし、チヨツトした言語應對の失禮から、理非をいはさず、直ちに帶刀を拔いて斬殺すのみならず、彼等同輩の間でも、些細の事から果合をするといふやうな事は珍しくなかつた。今日から見れば如何にも野蠻とも亂暴ともいふべきで、決して稱むべきことではない。しかしその代りに廉耻といふことを尚んで居た

から、自己の利害損得ということを考へて、利欲ばかりを計るといふ念は比較的に淡薄であつた。それは彼等とても一身の利害損得を計るの念が無いのでは無いけれども、彼等は利欲よりも名譽を重んじたものである。利欲の念は禽獣にはもあるが、名譽の念は禽獣には無い。名利ともに聖賢の眼より見れば論ずるに足らぬものであるけれども、之を比較すれば利欲は卑劣で名譽は高尚である。人も動物の一種であるからは、天然に利欲の念の無いものは無いのであるが、それを逞にして義理を辨へず、他を排し斥けても、自己の利欲を得んと爭ふに至つては、禽獣の道であつて、人の道では無い。ソコデ人の道は、この動物本有の自我的利欲の念を抑制して、先づ人を立てるやうにすべきであると知るのが、人たる所以の智識である。その智識の通りに決定して動かぬのが、意志の堅固といふものである。封建時代の「武士氣質」といふものは、この意志の鍛錬から出來て居たもので、當時の武士は種々の弊害もあつたけれども、人格上一

種の美德を備へて居た。

（三）

然るに維新以來廢藩置縣となり、所謂「武士氣質」ともいふものは、年を追うて衰亡して來たやうである。是れは一方では士族の家祿といふものが無くなり、衣食に困る所から、心ならずも義を輕じて利を重ずるやうになり、所謂「恒の產無ければ恒の心無し」で、節義といふものが次第に衰へて來たのであるが、一方には歐米の物質的文明が輸入せられて、功利主義、實利主義などといふことが盛に鼓吹せられ、人々相競うて智識を研くことに汲々として怠らぬやうになつたのはよいが、前にもいふ通り智識ばかり發達しても、情感、意志が相伴うて發達しないでは不具であるのに、今日の文明は、智識萬能主義で、而もその智識も利欲を計る方の智識、自己一身の利欲を計るの念のみ增長して、他人は勿論父母妻子を顧ず、まして社會國家などの事は眼中に無いやうな有樣である。今日の所謂紳士と

か、成功者とか稱する者は、金モール、サーベルを着けた狼シルクハット、フロックコートを着た虎のやうな奴が多い。彼等はその巧智を以つて、一時は天理人道を蔑して、自己の爲めに他人を呑噬し、國家を蹂躙するけれども、虎狼は矢張虎狼で、如何に暴威を逞うしても、遂に天理人道を歷けることは出來ぬから、續々監獄に打き込まれ、眞成の虎狼の生活を爲すのである。しかし彼等とても本來の虎狼ではないから、智識は一般の人より慥に勝れて居るが、意志の鍛錬といふものが無いから、精神上の不具者で、丁度手長猿のやうなもので、

長い手は直ぐに後へまわりけり

身から出た錆で着物を赤くする

といふ狂句の通りになつて仕舞う。何ほど汽車や電車が縱横に通達し、電話電燈が掛つて自由がキヽ、飛行器が發明せられて鳥の眞似が出來ても、肝要な人の道を行ふことが出來ぬのでは、文明でも開

化でもない。人間が進化したのではなくして、退化して禽獸になつたのであるから、若し今日我が國の狀態が、文明とか開化とか稱するものならば、文明開化ほど人間に有害なものはない。

(四)

印度、支那、朝鮮等の歷史を觀れば、早くから開けて居て、文物もなか〳〵盛に發達し、仁義禮智の敎も弘まつて居たのであるが、何故に今日の如き悲境に陷つたかと考へて見れば、種々の原因もあるであらうが、その重なる一大原因は、決して彼等が智識の缺乏ではなくして、道德の衰頽である。即ち彼等が只自己一身の利欲、而も只目前の小利欲のみを計つて、その他を顧ないことが原因である。印度でも支那でも他國が侵略したり、征服したりしたには相違ないが、是れが其土地が狹く、其人民が少ないが爲めではなくして、彼等の元氣なる道德が衰頽して仕舞つたからである。朝鮮の如きは最も手近い例である。是等の例を見れば、其の國の盛衰興亡する所以

は、その國の元氣即ち道德の盛衰に因るといふことは明かである。

（五）

我が國も維新の革命以來、從來一國の柱石といふべき士族の道德が衰へ、謂ゆる「武士氣質」といふものは地を掃つて仕舞い、西洋の物質的智識のみを唯一無上のものと心得、一時は全くこの智識に心醉して居たが、中頃より國粹保存主義が皷吹せられた結果、幾分か元氣が恢復して來たから、日清の役、北清の役にも外國と戰つて大捷を得、ことに日露の大役に於て、前古無比の大捷を得、遂に世界列強の仲間入をするに至つたのは、誠に賀すべきことではある。是れは單に武器の精銳や、軍律の整齊して居たとか、居なかつたといふことが、原因ではなく、我が國民には「大和魂」「武士氣質」といふ、祖先傳來なる一種特別の精神があつた爲めに、歐米列國が寄しく強敵として畏れて居た大國と戰つて大勝利を得たのであるといふことは、世界各國が共に認めて稱嘆して居る所である。しかし

腕力の爭鬪は人間の好まざる所であるけれども、先方に於て天理人道を蹂躙して、理非を正すことが出來なくなつて、萬々已むを得ない場合に臨んで、干戈砲銃に訴へて非道を征服するまでのものである。それであるから戰爭は百年無くても、少しも社會國家にさしつかへが無いのみではない、戰爭などは永久に無いのが、人々の希望する所である。希望する所ではあるが、各國と相對立して居る上は、その希望に反して已むを得ず、互に相戰ふことがあるから致方がないのである。萬々已むを得ずして遣る戰爭に勝つことが出來るからといつて、それで完全な人間とは謂はれぬ。たとひ外敵に勝つことが出來ても、自己身內の敵を降伏することが出來んでは、我れ自ら其身を亡すに至る。かやうなことでは眞の大丈夫、眞の勇者とは謂はれぬ。世界は益す進化するに隨つて、腕力の競爭は自然に衰へ、智識道德の競爭となるに相違ないが、それは遠き未來としても、我が國現今の處で既に非常なる困弊に陷つて居るが、其の原因は、各國

の貿易商業の關係もあらうが、それよりも最も重大な原因は、連年戰爭の後、人心が華奢に流れ、上下共に僥倖を求め、贅澤を逞うせんと望んで、トント眞摯着實の風が無いからである。今日の有樣でズン〳〵と流弊が盛になつていつたならば、たとひ何千萬噸の軍艦、何百師團の兵士があつても、自滅するより外はない。

外からは指もさゝれぬ要害を
內より破る栗のいがかな

といふ道歌の通りである。それだから今日は國民各自が互に相戒めて、人々眞の大丈夫、眞の勇者となるやうに修養を致さねばならぬ。

(六)

大賢孟子は、

富貴も淫することを能はず、貧賤も移すことを能はず、威武も屈することを能はず、此れ之を大丈夫と謂ふ、

といひ、西哲トーマス・ブラウンは、

敵に勝つを以て勇と爲すこと勿かれ。己れが悄慾に克ち得て、始めて眞の勇者と稱すべし。

というて居る。東西の賢哲、その語句は異なるが、其意は同じである。セネカは更に、

大人とは、強剛の決斷を以て善を撰び、嚴格に內外の誘惑を拒絕し、最も重き責を悅んで負ひ、困阨に遇うて平靜なるもの是れなり。

というて居るが、今日の我が國民は、正しく此の語が示すところの大夫丈、勇者たるの資格を缺いて居る。それ故に何程智識が進んでも、その智識が判斷する通りに實行することが出來ず、却て彼等が無學無智と輕蔑する車夫馬丁、さては乞食にも劣つた行をなす者が、上は高等の文武官、學士博士、代議士等の中に澤山あるではないか。如何にも歎かはしい次第である。しからばドウシテこの元氣を恢復することかといふに、外ではない。孟子が、

其の氣たるや、至大至剛、直を以て養ひ、害することなければ、天地の間に塞つ。其の氣たるや、義と道とに配す、是れ無ければ餒る。

といはれた、謂はゆる浩然の氣を養うが肝要である。そして此の氣を養ふには、直を以てすることが肝要で、その直を以て養ふといふは、意志を鍛錬して金鐵の如くにして、一言一行悉く道義に外れず、如何なる誘惑に遇ふも、如何なる困難に逢ふも、斷乎として動かず、慴れず、只守るべき道を失はぬやうに勤め行ふべきである。

（七）

天保年間の事であつたさうであるが、大坂難波橋筋の備後町に、年の頃五十才ばかりの乞食が、十四五才の乞食の子を捕へて膝をとうて地に押付け、上に乘つて、いひますには、己れ憎な畜生め、おれが平常いふ事を、己れは何處へ聞きおつたぞ。そのやうな根性では、いづれおれ等が首へまで綱をかける奴じやゆえ、そのまゝに置

置れぬと、握拳をしふりあげて殴しく折檻を致しますを、側にまた年の頃四十ばかりの女乞食が、てうと立て見て居ながらいひますには、それみよ、常々爺さんのいはしやる事、性に入れて聞かぬから、今そのやうな眼にあふのじや。おりやモウなんにもいはぬぞよと、いふばかりで更にとりさへる氣色も見えませねば、かの男もます〳〵撃をふるはして、扨も扨も憎い奴、ぞふしてやつたら腹がいようかと、きやツ〳〵といふを耳にもかけず、蹈つ蹴つの目に合せますゆえ、杜來の人もだん〳〵立ちどまり、てうと見て居りますうち、あまり嚴しく打ちすへますから、その中の一人が見るにしのびず、側へ寄つていはれますは、これさ、マア待て。そのやうに殴しくするには定めてなんぞ譯もあらうが、おれが挨拶してやる程にマア堪忍してやれといはれましたれば、彼の乞食が申ますには、イヤ御旦那もありがたうは御座りますが、放つておいて下さりませ、こんなものを活しておいては、どうも夜の目も寢られませぬというて、涙をこ

ぼし齒ぎしりして、ます〳〵痛めるけしきゆえ、外の人も口々に、それはさうであらうけれども、今日のところは我々が言葉にめんじて赦してやれといひましたれば、彼の乞食は涙ながら土に手をつき、捨おかれぬ奴なれど、御旦那方が、そのやうに御挨拶下さるゆえ、まづ今日は赦してやりますが、扱て〳〵なさけない奴で御座ります。御聞なされて下さりませ。最前此奴が此所でうつくしい餅を十斗拵から出しては喰ひおります。その餅は私が兼々見覺のある餅で御座りますゆえ、何所でもらうて來たのかと問ひましたれば、御堂前の北の辻に辻見世を出して御座る餅屋さんに貰うたと申します。それは合點のゆかぬ事、商賣になさる餅を、そのやうに深山に乞食に下さる筈はないが、盜で來たのじやないかと根を推して問ひましても、貰ふたに違ひはないと申しますゆえ、さりとは不審な事と存じ、あれなる噂とも申合まして、どうも安心が出來ませぬゆえ、前刻御堂前へ參りまして、其所のやうすを窺ひますれば、餅屋さんのいはし

やるには、さて〳〵油斷のならぬ事じや。さつきチト用があつて、雲をチヨット明けた間にツイ餅を十ばかり盜まれて。これは定めてまと話し合つて御座りましたが、此あたりをうろつきまはる乞食の小供であらうかと、隣見世の婆さりやこそおのれと、此處へかへり、いろ〳〵責めて問ひましたれば、やう〳〵盜んだことを白狀いたしましたが、何とマア御覽じませ。なさけないことじや御座りませぬか、私も只今こそかやうな乞食は致しますれど、元は遠國の小百姓、親の代から不仕合で持高にはなれ、村中へ雇れて其日〳〵を送りますうち、いかなる過去の因緣や、夫婦とも長のわづらひ。少しばかりの諸道具や鍋釜まで賣り拂ひ、種々と養生いたしましたが、命程は助りましたが、御覽の通り、夫婦とも手足よわいからだとなり、何することも出來ませねば、村中の厄介となりますも氣の毒と、四五年前から國を出て、かやうなさもしい乞食となり、人樣の門に立つて御あまりは貰ひますが、つ

いに一度も人の物塵一本箸片々、盗んだ覺は御座りませぬ。そのうへ人と生れながら盗してもよいものなら、此のやうななりをして、さもしい乞食はいたしませぬ。極寒の冬も薦一枚、缺椀もつて門に立ち、寒いめやひもじいめの、うき艱難をいたしますも、畢竟盗をせまいがため、それゆえアノ奴にも明け暮れいうて聞かせますは、かやうに乞食になり下るも、好んでなつた事でもなく、段々の不仕合つもりつもつて斯くの仕合、天命の乞食なれば、只正直な乞食せよ、必ず他を羨むな、形に乞食はするとても、心に乞食をして呉れな、からだに薦は着るとても、心に薦を着て呉れなと、常々いうて聞かせますに、それにマアあの奴めは、何處へ聞き居りましたやら、最前もそのやうな大それた事いたしました。三才子のこゝろが六十までと、ちいさい時からアノやうな惡根性もちましては、いづれ後には巾着切、店替じやの、萬引じやのと、段々手がまわり出すと、ついには人様の手にかゝり打殺されるは知れた事。よしそれまでにゆ

かずとも、御公儀様の御手にかゝり、追放じやの、遠島じやのといふ、さま〴〵の御厄介を備へる奴にちがひはないゆえ、ついつそそれまで活けおいて、人様の手を借らうより、私が手にかけて殺してやらうと存じましたが、あのやうにあなた様方が仰られて下さりますゆえ、今日程はゆるしてやります。アヽ命冥加な奴で御座ります。コレ〳〵おのれも爰へ手をついて御禮申せ。アヽありがだうぞんじますと、夫婦が互に顔を見合せ、涙をホロ〳〵こぼしましたから、見て居る者も感心して涙をごぼさぬ者はなく、持合の御錢など出してやるものも御座りましたと申すことじやと、奥田頼杖の講話に記してあるが、彼の乞食は形は見苦い乞食なれども、心は清い君子大人、體には薦を着ても、心には錦を着て居る。是れが孔子のいはれた。「志士仁人は生を求めて以て仁を害することなし、身を殺して以て仁を成すことあり」と申すもので、眞の大丈夫と謂ふものである。

要するに今日の我が國民は、小智識を以て目前の小利益を求め、虛榮を貪つてばかり居て、高位大官、學者識者も、皆その行はこの乞食にも劣つて居る輩が多いが、是れは畢竟して智識に重きを措いて、意志の鍛錬を怠つた結果である。それゆえに智、情、意の平均をたもち、圓滿完全な人格を養成するには、是非とも情感、意志を鍛錬することが必要であるが、さしあたり先づ意志を鍛錬するのが第一である。トコロでその意志を鍛錬するには、坐禪を行ふに越したことは無いから、人々が此に心を留めて適宜の方法を立て、坐禪を實行せらるゝことを希望する次第である。

六　身心脫落

一　吾我を離る

「身心脫落」といふことは、高祖承陽大師御一代の法門で、『普勸坐禪儀』を始めとして、『正法眼藏』及び『永平廣錄』等の中に、幾度も出てある語で、我宗の極意は、此の四字に盡きて居るといふてよい。しかし之を高尙に說き、深遠に談ずるのは、專門の學者の爲すことで、固より一朝一夕に述べることは出來ず、よし出來るにしても、專門の學者ではなければ、直ちに合點がゆかぬ。そこで之を平たく云へばドウイフことであるかといふに、脫はヌケル、落は ヲチルと訓む字であるが、身も心も脫け落ちるといへば、蟬の蛻殼の樣になることでもあらるかと思はれさうであるが、決してそんなことでは無い。魚類や果物などならば、干物にしても、人の食料になりますが、人間の干物は使ひ向きがありませぬ。しからばドウイフ

王合に脫落するのであるといへば、承陽太師は、

佛道を習ふといふは、自己を習ふなり。自己を習ふといふは、自己の身心、他己の身心をして脫落せしむるなり。

と仰せられ、又、

學道は須く吾我を離るべし。設ひ千經萬論を學し得たるまと、我執を離れずんば、終に魔境に墮つべし。

と仰せられてある。この吾我といふは、吾が身我が心といふ意解である。吾々の身體は、地、水、火、風の四つが結合して出來、心は、受、想、行、識等より成り立つて居るが、これは吾一人だけ別に出來てあるもので、他人は又別なものであると思ふのが、凡夫の淺ましい考である。この我が身吾が心といふ執着から、我他彼此といふことが起る。我が身はドコマデも安樂に、我が心は飽くまで愉快にありたひといふ念からして、遂に他人を排し斥けても、我れを利益しやうとする、之を貪欲といふ。我が心に叶はぬことがあれば、他人に

對して怒る、之を瞋恚といふ。吾が心に順ふを貪り我が心に違ふを瞋るのは、畢竟法界平等、即ち天地同根萬物一體の理に暗いから起るので、之を愚癡といふ。この貪欲、瞋恚、愚癡は、我々の身を亡ぼすもので、あるから三毒といふ。一切衆生は此の三毒といふものがあるので、それが本になつて種々の煩惱妄想を起し、無量の惡業を働き、自ら苦境に沈むのである。之を迷ひの凡夫といふ。例へば、堀井戸や深川の水は、一見した所では、清淨にして少しも濁りが無いやうであるけれども、器に汲んで久しく置けば、次第に濁つて來て、遂にボウフラが生ずる。これは本來腐敗すべき濁りがあるから、日を經るに隨つて其れが顯れて來るのである。しかるに之を機械にかけてスッカリと其濁氣を拔き取つて、蒸溜水になして仕舞ひ、清淨なる瓶に入れて置けば、何日經つても決して腐敗することはない。吾々も生來この貪欲、瞋恚、愚癡の三毒といふものがあるから、それを修行の力によつて對治して、その根本の「我執」といふものを

スッカリと脫落する、之を「身心脫落」といふ。この心身脫落になつたのは、水を機械にかけて本來の濁氣をスッカリと抜き取つて、蒸溜水になしあげたやうなもので、復び貪欲、瞋恚、愚癡の起ることは無い。佛敎で、大悟の、成道のと申しても、ツマリこの境界に到るより外のことは無い。

サテこの三毒を抜き去つて、本來の清淨身になるに就て、戒、定、慧の三學、四弘誓願、六波羅蜜、乃至八萬四千の法門等があるけれども、そんな微細な講釋ばかり致しても、徒らに藥の効能書を說明するやうなもので、之を實際に服用せんでは、何の効能もないことである。昔しから戒律を主として、一日二食とか一食とかで、その餘は食事をせず、金錢物品を手に觸れず、衣服も木綿や麻の外は着ないといふやうに、戒律を嚴重に守つて、日用の行を清淨に致してゆく律宗といふがあつて、その行振は通常の人に眞似のできぬ所であるが、それでは律宗の僧侶でなければ、成佛得道は出來ぬかいふ

に、そうではない。僧侶でなければ行ふことの出來ぬ佛法ならば、世間には無用な物となるわけである。佛法は世法に異ならずといふことがあつて、世間と別なものではない。しかるに彼の律宗で第一の高僧と稱せられて居る某律師が、嘗て或る寺に法話の招待に應じて赴かれたところが、午前十一時限りに食事をする規則であるから、その寺でも前以つて用意を致して居たのであるが、ドウシタ間違であつたか料理屋から時刻になつても持つて來ない。ソコデ幾度も催促をして漸く持つて來たから、早速之を律師の前に運んで、遲刻したことを詫びて進めた。スルトこの時は既に十一時が五分ばかり過ぎて居たので、最早喰ふことが出來ぬから、律師は勃然として烈火の如く怒つて、『今頃になつて持て來たとてドウナルモノか』と云つて、その辨當を拋け付けられたと云ふことである。その時席に並び居た紳士夫人達は一同にアキレテ互に顏を見合せ、窃に律師のこのはしたなき振舞をさげしんだといふことである。これは實際その席

に列つて居た人から直に聞いた話であるが、ナント歎しいことではないか、學德一世に高き律僧として尊崇せられる身でありながら、瞋恚を愼むことが出來ぬ爲めに、スッカリその價値を落して仕舞つたのみならず、自身にてもどれほど苦しいことであらふ。かうして見れば、如何に戒律ばかり嚴重に守つても、身心脫落は出來ぬことが分かる。

しからば智慧が明かになればよいかといふに、智慧の明かになることは結構であるけれども、是れも只經論ばかり研究したからとて、それで本智が開けるといふわけにはゆかぬ。臨濟宗近古の明匠と稱せられた播州網干の龍門寺の盤珪禪師といふは、德行の優れた高僧で、赤穗義士の第一たる大石良雄なども、この人に參じて、大事を明めたのであるが、禪師の法話の中に、

漸く成人して身どもも師匠取しまして、母が大學の素よみを習はせまして、大學を讀みます時、「大學之道 在レ明二明德一」と白す

所に至りまして、この明德といふことが疑はしくござつて合點が行かず、すませいで、久しうが間この明德といふものを疑ひましたわいの。去る時儒者衆に問ひますれば、この明德といふものは、いかやうなるものぞ、どのやうなのが明德といふものぞと問うてみましたれども、その儒者も知りませぬ。ある儒者の白すには、そのやうなむづかしいことは、よく禪僧の知てゐるものじやほどに、禪僧についてお問ひやれ。明德のことは、我等が家の書に出てあつて。日夜朝暮口では文字の道理をもよく云へども、明德と云ふものは、どのやうなのが明德といふものやら、實に我等は知らぬと云ひまして、埒が明きませなんだ。

とある。しからば何程經論を研究致しても、只口先ばかりで講釋する分では、この儒者衆と同樣で、遂に身心脫落を得ることは出來ぬ。サテ盤珪禪師は、その後去る禪僧に就いて明德のことを尋ねられると、坐禪をすれば明德が知れるとのことで、山中に入つて五日も十

日も斷食をして坐禪をなし、或は草菴に閉籠て坐禪し、種々な苦行を致し、幾たびか死地に入つて、遂に明徳の一大事を明らめて後、諸方の招に應じて、處々で懇切に平易な俗語で法話をせられたが、その詞は、強ち足を曲け手を組んで、難解の古則公案等を提撕するに及ばず、只不生の佛心といふことを明らめればよいとて、くりかへし〳〵說き諭された。この不生の佛心を明めるといふは、即ち身心脫落のことである、さすれば坐禪といふても、無理に手足を組んで難儀するばかりがよいといふでもなく、又難解の古則公案を透りぬけるといふことがよいでもない。イヤたとひ一千七百則の公案を悉く透りぬけても、この三毒が拔ければ、輕業師の籠脫にも及ばぬ。近時の禪僧と稱する人々の中には、口では悟つたやうに大言壯語を吐き、大盤名刹に住持として、大善知識と仰れながら、貪慾の念深くして、みだりに金錢財寶を貪り貯へ、瞋恚の念熾にして、門下の雲水僧を呵り罵り、時として笞や棒を以て打擲する向きが多い。斯

くては俗人にも劣るわけで、誠に慚愧千萬な次第である。それ故に古則公案に參ずるは惡いことは無いが、それよりは先づ以て、我執を離れる修行が肝要である。その我執を離れるには、身心を靜めて坐禪するのは、固より大切であるけれども、その坐禪の工夫が日用の行にあらはれてゆかねばならぬが、その行の上に就て先づ、

二　知足

といふことが肝要である。知足とは、足ることを知ると訓むで、貪慾の反對である。人間が朝から晩まで寐ても、寤ても、苦勞の絕えないのは、足ることを知らず、飽くまで衣食住、功名富貴を貪る慾念があるからである。『佛遺敎經』に、

若し諸の苦惱を脫せんと欲せば、當に知足を觀ずべし。知足の法は、即ち是れ富樂安穩の處なり。知足の人は地上に臥すと雖も猶ほ安樂なりとす。不知足の者は天堂に處すと雖も亦意に稱はず、不知足の者は富めりと雖も而も貧し、知足の人は貧しと雖も而も

富めり、

と仰せられてある。この意を道歌で、

世の事は足るにまかせてこと足らず
　足らでこと足る身こそ安すけれ

と詠んである。又近古淨土宗の大德行誠上人も、

法の身はたらひですませ墨衣
　ものほし竿の欲にかゝるな

と詠まれてある。かやうに云へば、或る人は直に、佛敎は兎角消極的退守主義であるから、今日の積極的進取主義に適せぬといふ向もあらうが、知足といふことは、貧乏人は何時迄も貧乏にかぢりつき、愚昧な者は何年でも愚昧に止まつて居るといふことではない。貧賤貧富各その位置が定まつてあれば、その位置に滿足して、敢て法外の貪欲心を抱かぬことである。例へば、衣食住にしても、その人々の位置によつて適當な程度がある。その適度に安んじて居ることで

ある。位階勳爵等も同樣で、その材力功勞によつて等差がある。然るに知足の念なき者は、どれほど進んでも、これで滿足することはないから、何時も不平の絕えることはない、不平の絕えないのは苦痛である。

昔し或る貪欲の强い男が、金錢を貯蓄することを好み、衣食住は非常に儉約し、義理をかき、人情をかき恥をかきして、一生懸命に蓄財して、日々その金錢を出して勘定して、その多くなるのを見て喜んで居た。一日二階の上に昇り、他人の來るのを避けんが爲めに梯子をハヅシ、自分一人で例の金箱を開け、牀の邊から貨幣を一枚づゝ列べて、段々と後へすざりながら貨幣を列べてゆくうちに、遙に梯子の掛つて居た入口の處までスザツテ來た。けれども彼の男は、貨幣の方にばかり目をつけて居たので、自分の身が入口の處までスザツテ來て居ることに氣が付かず、猶ほ後へ〳〵とスザツテ貨幣を列べていつたものだから、トウ〳〵入口の處から階下の板間へコロ

ゲ落ち、腦を打つて死んだといふ話がある。それは固より格外な馬鹿者の一例であるが、蓄財ばかりではない。富豪達が相場や株式や役機商をやつて、一朝に巨萬の財産を失ふたり、或は、住宅、衣服等の贅澤をなし、猥りに虛榮を衒うて借財をなし、或は酒色に耽つて身を亡ぼし、或は功名權勢を貪つて危險に陷るなども、樣子こそ異なれ、その身を亡ぼすことは、彼の馬鹿者と同一である。近頃知事や大臣を勤めた人が、虛榮虛勢を貪つた爲めに破產をしたり、或は一國の代議士、天下の學者が賄賂を取つたり、詐僞取財の爲めに牢屋に打ち込まれて、父母妻子に憂目をかけ、自分の恥のみならず、一族祖先の名まで汚す者が澤山あるが、是れ皆この知足といふことを知らぬからである。ソコデ人々足ることを知つて、衣食住をはじめ、功名權勢等一切萬事に付て、過分を望まず、節儉を守つてゆかねばならぬ。節儉と吝嗇とは大きに違ふ、吝嗇は人の道でないが、節儉は人の美德であつて、節儉を守つてゆく者は、分に安じて勤勉

するから、貧者も富裕になり、富者は益々富を累ね、賤者も貴くなり、貴人もその位を失ふことはない。臨濟近古の大德澤庵禪師が、昔てその俗兄を誡められた手簡は、平易通俗で誠に適切である。

御手前萬事御才覺肝要に候。先背も天道次第との御文尤に候。其分なる義も候得共、たゞ天道より金銀米錢をあたへたる事はなく候。縱へば一石の米をかたばつしよりくらひはてゝ、其時天道より借金借米有間敷候。何事も人間の業と御心得可有候。天道は此方次第の物にて候。世上申す天道は、昏に違い申候。古今に違の葉は丸く、松の葉は細く候。其の如く我身に應ずる天道をよくわきまへ、少年の者は引さがりて罷在をせず、大名は夫程に身を持つ所、則ち天道に任すると申候。百石取身に二百石とる人の臆、則ち天道に背き、身に不似合振舞をする人は、一生貧乏神の貢物にて候。鵜の眞似する鴉は、水に溺れて死する、天道の罰にて候。鵜は鵜、鴉は鴉、天道の本理にて候。斯樣なる詞を不知して、天

道と計りいうて寢て、いつも天道より彼に食を被與候樣に思ふ事、大なる誤也。人は品々に世をわたる天道にて候。然るに細工人も定規なくてはならざるものにて候。人は人を定規にするが能候。但我心の樣なる人を定規にせば、三五の十八にて候。分限を我と不申して、身を持つ分別能く摺切ぬ人と申す事にて候。杓子定規如何。是は天道に御背き候間。つまり惡敷候。半分笑止候。我等申す事違ひ申すまじく候。冬は寒きものにて候。若しあたゝかなれば、明年涼しからず。夏暑からざれば、秋萬事あしく候、物事に位の正しき處が天道にて候。大小ともに身の分限に應じて、十人抱可然候得ば、七八人心持後悔少く候。月を御覽可有候。十五夜は圓滿に候へば、一分づつかけ申候。是れ人間の見せしめなり。

思へたゞ滿ればやがて缺く月の
十六夜空や人の世の中

此歌至極の理に候。長文のていむつかしく候へども、兄弟に生れ

あひ、御爲よく候へかしと如此候。何とぞふうをかへ候て、借金のなきやうに御分別專一に候。親類に遠ざかり、したしき知音に恨み結ぶも、多分貧故にて候。

心だに誠の道に叶ひなば
祈らずとても神や守らん

皆是れにて候。尙期後音之時候。恐惶。

その文意は極めて卑近なやうであるけれども、能く味うてみれば、知足節儉の要を盡くしてあつて、何人も之を守つてゆけば一生過ちなく渡ることが出來る。その次は、

(三) 堪忍

が肝要である。堪忍といへば、誰れもその大切なことを知つて居るといふであらうが、之を行ふことは極めて難い。余が祖父は忠左衛門といつて、幼少より藩主の扈徒となり、次第に昇進して、寺社奉行と町奉行とを勤めた人であるが、幼少にして父に亡くなられたに

依て、家政も裕かになかつたので、内職に提灯や團扇を張つて、その不足を補つてゆかれたこともあつた。その後老年になり、隠居の身となつてからも、矢張提燈團扇を張つては、親戚故舊に贈られた位であつたから、平生身を持つこと頗る倹素であつたが、これは只家政の都合ばかりでなく、自ら修養の結果であつた。隠居後自ら讀んだ書物の中から、修養に資けとなる事どもを、反古紙に抄記して、『知足錄』『堪忍錄』各一卷を作り、時々之を讀んで居られたので、歿なられた後に、父に願つて送つて貰つて、一讀して深くその修養に心を用ひて居られたことに感心し、どうぞ自分もこの二つだけは守りたひものだと、今日も修養致して居る次第である。しかし勘忍といふことは、とりわけ守り難いもので、『佛遺教經』にも、

忍の徳たること持戒苦行も及ぶ能はざる所なり。能く忍を行ずる者は、乃ち名げて有力の大人も爲すと仰せられてある。それであるから餘程學問知識のある者でも、容易に至うに行ふことは難い。

四　文盲者の堪忍

或る人が、無學文盲なる者を異見して、世の中を渡つてゆくには、外の事はいらぬ、唯堪忍の二字を能く守ればよいといへば、文盲の人は、頭をかたむけ、「かんにん」とは四字ではありませぬかと、指を折つて數へ、貴下は御考違でありませう。「かんにん」と四字でありますといへば、異見した人がいふには、愚鈍な人物である。堪忍とは「たへしのぶ」とよんで、二字であるといへば、又頭をかたむけ、「たへしのぶ」ならば、又一字ふえた、五字となるではありませぬか。何と仰せられても、私等は四字とおもうて居りますから、四字でかんにんいたしますと云ふから、彼の人は、汝の様な愚鈍な文盲者は、實に論すことは出來ぬ。人に似て虫同様である。汝が勝手にせよと、大に怒つた。そこで文盲の人は、何となりとも仰せられませ、私等は「かんにん」の四字と知つて居りますから、惡口せら

れても、少しも腹を立てませぬと云つて、笑つて居たといふことである。

五　堪忍の稽古

柳澤洪園といふ人の文學に長じて居たことは、世人の能く知つて居る所であるが、修養にも心を注けて居て、類りに堪忍の稽古をしたもので、

ある人、堪忍の二字を座右にしるしおきて、常にこれを見る時は、おのづから心に止りて、日用の心がけよろしといへるものあれば、堪忍は修業せざれば、身に感せざるゆえに、堪へざることはよく忍ぶことなり難し。予も堪忍を守れることをおもふに、乘合の舟ほど事になるゝに便よきことはなしと思へば、僕一人をつれて、京より夜舟にて浪華にあそび、また浪華よりも又舟にて京へのぼりつゝ、ひたぶるに舟に泊れるを樂みとして、堪忍の稽古せり。

（京の伏見より大阪八軒屋町に至る間淀川を上り下りする「三十

石」と稱する小艇あり、一人の坐する所狹少にて、坐したきり、身動きもならぬ位にて、極めて窮屈であるから、一夜をその間に明かすは實に難儀である、（余も三十四年前に一度この舟に乘つて、今猶ほ其時の苦痛を覺えて居る）人の世にあること、舟に乘り合ひて泊りしをおもひいづれば、いかほどの不自由たりとも、忍ぶに堪へざることなかるべし。たとひ疊一枚の家に住むとも、乘合舟には優るべし。夜泊のせつなき、膝を折りて足を縮め、人の足を枕として押し合ひ、睡らんとすればゆすり起され、少しまどろむとおもへば、鼾に目さめて、起ふしともに心に任せざるは、たとひ一夜といへども、生涯もなほひとしかるべし。

六　中澤道二の堪忍

心學の大家中澤道二といふ人は、その堪忍を守ることに付、非常に苦心をしたものであるが、

なる堪忍は誰れもする

ならぬ堪忍するが堪忍

といふ道歌を詠んで、人にも教へ、自らも之れによつて堪忍の修業をせられた。ある時備前の藩主、池田一心齋侯が、この事を聞いて、道二翁を邸内に呼んで、奥女中や家來共に道二翁の話を聽かさうといふので、そのことを賴まれた。道二翁は一心齋の邸に到つて案内を乞ふと、應接の間に通うされて、茶菓等の饗を受けて、どうぞ暫く御待下されとの取次の詞に、二時（今日の四時間）ほど待つて居た。その時取次が出てどうぞコチラへと案内をするから、今度は話をするのかと思うて行くと、又此方の間でどうぞ、暫く御待下されというた。又茶菓等を供せらて、無く待つて居るこの時道二翁は、二時も待たして置いて、又も此の上に待たせるとは、無禮なことであると、腹を立てかけたが、なる堪忍は誰れもする。ならぬ堪忍するが堪忍だから、是は怒つてはならぬと、ヂッと堪忍し

て二時ばかり待つて居ると、漸くのことで、こちらへ御通り下さいとの案内につれて行つて見れば、一心齋侯は上座に控へ、多くの女共を集めて大酒宴が始まつて居る。ソコデ道二翁は、心の中で、コレは無禮極まる、自分は酒を飲んで居て、人を待たせて置くとは亂暴であると思つたけれども、まづ〳〵堪忍して居ると、一心齋侯は、マー一杯飲んでくれとの挨拶であるから、道二翁は、私は不調法でありますから戴きませぬといへば、その嫌ひな處を飲むのが面白い、サー飲んでくれといふので、家來が大きな杯を持つて來て酒を注ぐ。こちらは辭退をするのに、強ゐて注がうとするので、酒が溢れて袴に被つた。スルトこれ迄堪へて居た道二翁は立ち上つて、私は今日講釋を致しに參つたのである。然るに此の御待遇は何事でござる。斯る處で講釋をしても何の効もない。私は是で御暇仕りますと云つて出て行つた。ソウスルトこの時その座に並んで居た人々が手を叩いて、「なる堪忍は誰れもするならぬ堪忍するが堪忍」といひましたか

ら、道二翁はハット思うて、其處へ手を突いて、私が腹を立てましたのは實に惡うございました。私が只今ムラ〳〵として立上りましたのは、未だ私の修業が足らぬのでございます。どうぞ私が是迄申しました事の、私の行ひと違つて居つたことを御許し下さいと申しました。ソコデ一心齋侯も、此人ならば家内の者に講釋を聽せられると思うて、之を連れられたといふことである。自ら「なる堪忍は誰もするならぬ堪忍するが堪忍の修業をした道二翁でさへ、實際人に接し事に臨んでは行ひ難いことは此通りである。まして平素心掛の無い者は申す迄もない。

七　石田梅巖の修養

石田梅巖は有名な心學者であつて、平常その身を持つこと甚だ謹直で、自ら奉ずること極めて儉素であつたので、その感化を受けて非を改めた者も多かつたのであるが、只この我執の一點に至つては、晩年に至るまではなれなかつたと見え、その行狀記に、

先生五十歳の頃までは、人に對して居給ふに、何にても意に違ひたる事あれば、苦り顔し給ふ樣に見ゑしが、五十餘になり給ひては、意に違ひたるか、違はざるかの氣色少しも見ゑ給はず、六十歳の頃、我今は樂になりたりとの給へり。

と記してある。貪欲を離れても、瞋恚を離れて、無我の境に入ることの難いのは、これを見ても知れる。

知足、堪忍の如きは平凡の事であると思ふ人もあるであらうが、決して平凡の事でない。昔しから戒行の高い人々、學問の博い人で、貪欲は離れても、全く瞋恚を離れることの出來ぬ人が多い、が、若しこの瞋恚を離れて無我の境に達しなければ、身心脫落を得たとはいはれぬ。それであるから身心脫落といふことを、理論の上で高尙深遠に說くのも惡くは無いけれども、理論ばかりで實行が出來なければ、その効が無いから、先づこの知足と堪忍の二つを實行することを稽古するのが肝要である。若しこの二つの實行が出來れば、理、

論は兎も角も、修養の結果自然に心身脱落の妙境に遠して、眞箇の大安樂を得ることが出來るから、ごうぞ徒らに高言放論に趨らずに、卑近の處より修養を積んで次第に高尚の處に進むやうに心掛られたいものである。

七　警世小言

一　佛法の大意

白樂天は唐朝詩壇の四傑、即ち李、杜、韓、白の一人にして、絕代の詩人である。ことに平安以後鎌倉時代までは、我朝に於ける文學の本尊として崇拜せられ、『白氏文集』を諳せざる者は、學者にあらずと思はれたほどの人なるが、嘗て杭州の刺史となつて居た時、鳥窠の道林禪師に謁して、「如何なるか是れ佛法の大意」と問ふ。禪師、「諸惡莫作、衆善奉行」と答ふ。樂天、若しさやうのことならば、三歳の孩兒も道ふことを得べしといふ。禪師いはく、「三歳の孩兒は たとひ道ひ得るとも、八十の老翁も行ふことを得ず」と、樂天感服して益す〳〵修行をつみ、遂に佛光如滿禪師の弟子となつたといふ。「諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛敎」は、七佛通誡の偈というて、佛法の大意はこれに外ならず、吾人修行の期する所も亦之

れに過ぎない。

二　雲華の感化

豐前古城の正行寺の大含といふ學僧は、雲華と號し、又別に鴻雪とも號し、後に雲華院と云ふた、一代の碩學であつた。この人は眞宗東本願寺の末寺なる豐前滿德寺住持某の子で、安永二年四月に生れ、正行寺の風嶺といふ人の養子となり、文政二年高倉學寮の擬講となり、四年進んで嗣講となつた。講演の餘、書畫を樂しみ、最も墨蘭に妙を得て居て、嘗て仁孝天皇の御覽に入り、優賞を蒙つたこともあつた。京都に寓居十年の間、篠崎小竹、貫名海屋、田能村竹田、賴山陽等と親しく交遊せられた。賴山陽が日本外史を脫稿した時、雲華と親交ある眞宗高倉學寮の學長であつた易行院法海上人と云ふがあつて、山陽は雲華の紹介によつて、法海に謁して、法海に外史の評を乞ふた。スルト法海は山陽を一瞥して、近頃安藝の廣島から出かけて來て、文章を以て名を得て居る賴久太郎といふは御前か。聞けば、御前は廣島の藩士で、兩親も廣島に在るといふことだが、その藩主に仕へず、親にも事へずして、この京都に來て詩文を弄し、酒を飮んで、一身の氣慨を盡くして居るといふは、不忠不孝といふものである。御前が書いた外史の中の眼目といふべき楠氏は、日本無二の忠孝の人であるが、如何に文章が巧でも、御前のやうな不忠不孝な者の手で、日本無二の忠孝なる楠氏の事を書いては、誰も之を讀んで感奮興起する者は無い。サゾサと持つて還るがよいといはれ、才、一世を蓋ひ、氣、王侯を壓するほどの山陽も一言もなく、滿身汗になつて引き退いたが、流石は山陽で、この一喝に逢ふて非常に感悟し、その夜旅裝をなし、翌日未明に京都を發して廣島に皈つて兩親を見舞つたといふ。その後文化十三年二月京都に在つて『莊子』を講じて居た時、父の春水が死んだといふ訃報に接し、大いに慙いて直に廣島に皈り、父の葬儀を行ひ、三年の喪に服したが、父の死目に逢はなかつたことを非常に遺憾に思ひ、それから後は

終身『莊子』を讀まなかつたといふ。文政二年に母を京都へ連れて來て、諸方を見物などさせて、母を慰めた。ある時吉野山の櫻盛りの景色を見んとて、母を連れて見物に出かけ、その景色のうるはしいところを見て、母が大いに喜んで、「妾は非常に滿足した」といふを聞いて、山陽も「その御言葉を承つて私は大名になつたよりも嬉しうございます」と申したといふ。それから毎年母を迎へて慰めて居たが、後に住居を京都に定めてからは、母を迎へて厚く孝養を盡くしたといふことである。それから是れは南條博士から聞いた話であるが、雲華も山陽とは非常に交が親密であつたもので、山陽が未だ貧生であつた頃、十二月の晦日に門生の一人を雲華の庭へ使に遣つて、是非金子若干を調達して下さいと賴んだ。スルト雲華は一晩して、「金子の無心はよいとしても、時による、晦日の今日になつて突然金を貸してくれといふことがあるか、飯つて久太郎に、そんな金は無いといへ」と言ひ放つたので、門生はスゴ〳〵と門の方へ出

てゆきかけたが、その時雲華は、門生を喚びかへして、手にかけて居た念珠一聯をはづして、「これを持つて（雲華の信者なる）某町の某の處にゆき、拙僧が據無い事があつて入用であるから、この念珠を預け置くゆえに、金を暫く用達つてくれと申入れ、それを持つて歸るがよい」といはれ、門生はホット一息ツイテ、某の處にゆきて金を受け取り飯つて山陽に渡したといふことである。不忠不孝と罵られても、雲華に斯る暖かい情があればこそ、流石の山陽も感服し、從來の疎狂な態度を一變して、篤孝の士となつたのではあるが、兩者ともに爲しがたきことである。

三　獄中孟子を講ず

吉田松陰が時事に慷慨憂憤の餘、安政六年四月幕吏の爲めに捕へられて獄に下つた時、彼の妹千代女に贈つた手簡がある。それを見ても、彼れが從容自若として君子の態度を失はなかつたことが知れるが、左の一事を見れば、ます〳〵彼れが心を修養に致すことの深

きを知ることが出來る。彼は獄中に在つて、某を相手に孟子の講義を始めた。スルト某は、「何時死刑宣告を受けるか知れぬ身で、孟子の研究などは馬鹿らしいではないか」と云ふと、松陰は、「今日孟子を研究して居るのは、文字を解釋するのでもなく、文章を玩味するのでもない、只御互に履むべき道を研究して居るのである。人にして須臾も道を離れたら人ではない、人は命ある間は道を離れてはならぬから、今日その道の研究を致して居るのである」といふたので、某も感涙を流して謝したといふことである。修養に志す者は、この考がなくてはならぬ。

四　福澤翁の訓誡

先年釋宗演師と共に、福澤諭吉翁の招に應じて、翁の宅に至つて一席の法話を致した時、翁の話に、世の中に無學な者ほど憐むべきものはないが、サテそれが一轉するといふと、生物知よりは却つてよいものである。余が邸に出入をする糞取人が、至つて正直なもの

ではあるが、非常に強慾な性質で、只々金を蓄める一方になつて稼で居る。一日余に向つて、「先祖の年忌供養などといふことは、甚だ冗費のかゝる事であります。之を行はぬとても、先祖が怒るといふわけではないから、廿年に一回か三十年に一回すれば、大いに冗費を省くことが出來る、それから先祖の石塔も澤山ある上に追々增えて來るから、是れも一基に法名を刻みつけて、その餘は賣却すれば、幾分の金になり、且つは年中捧げる香華の料も省けるので、餘ほどの儲けになりますから、是れを實行したいと思ひます」といふた。余がいふには、それは慥かに利益になる。しかし猶それよりも儲かる事があるが、遣つて見てはどうだといへば、儲かる事なればドンナ事でも致しますから敎へて呉れといふ。ソコデ「汝が家父は餘程老耄して居るから遠からず死ぬであらう、死ねば葬式を致さねばならぬが、葬式をすれば村中の人が來て酒を飮み飯を食ふ、その外の費用も莫大である。これも致さぬからとて、死人が怒るといふわけで

はないから、スッカリと止めて、死んだならば汝が邸の中にある溜池に投り込んで置く、そうすれば日數の經るに隨つて腐敗する、それを時々丸太棒を以つてツ、ク、そうすれば遂に皮肉は溶けてドロ〳〵になる、それを糞桶に汲み取つて、田畑にやれば、結構よい肥料になる。葬式の費用が省けた上に肥料を得る。ナント甘ひ儲けではないか。汝は日頃父のことを老耄の穀ツブシ、早くクタバレばよいと云うて居る位であるから、そのうめ合せに此の儲けを遺らぬ」かといへば、只頭を低れて一言もいはぬから「金儲になるならば何でも致すといふではないか、なぜ返辭をせぬか」と責めかけると、漸く首を擧げて、「如何に金儲になつても、そんな事は出來ませぬ」といふ。「何故出來ぬ。人間の死んだのも、魚類や獸類の死んだのも同じ事である。魚類や獸類の死んだのをツ、キ、クヅシテ肥料にすることが出來るならば、人間の死んだのも出來るわけではないか」と詰れば、「同じ事ではありますけれども、どうも人間として親の遺骸を犬

猫同樣にツ、キ、クヅシテ肥料にする事は出來ませぬ」といふ。ソコデ余は大喝一聲、「馱れ。汝は人間ではない。犬猫である。犬猫は先祖の葬式もせず、石塔も建てず、年忌供養もせぬ。先祖の葬祭年忌は人間のする事である。今汝は人間のなすべき事をせぬといふから、最早畜生道に墮ちて居る者と思うて、先刻より畜生の道をいうて聞かせて居る。然るに人間として出來ぬといふからには、未た幾分か人間の精神が存在して居る。それが汝の本心である。汝今本心を認めたらば、從來のやうな畜生の心をふり捨てゝ、眞正な人間の道を履み行ふやうに心掛るがよい」と誡めて遣つたらば、鬼のやうな顏から涙を流し、先非を悔ひ行を改めると誓つて去つたが、その後は言行が一變して、村民の信用を得るやうになつた。是れだから時々〳〵訓誡を與へて遣らねばならぬ」と、翁が實驗談を聞いたことがある。

八　立身處世の道

一　成功

近來世間の風潮が變になつて來て、頻に立身、成功といふことを說き立て、種々の雜誌類も澤山に行れて、人々皆立身、成功を求むるに汲々として居るやうである。これは維新以來學術ことに西洋の科學が盛んで、學問萬能主義といふ有樣であつたが、そう〳〵學問ばかりではゆかぬので、商工殖産事業が盛になるやうになり、これに從事する者を實業家といふことになつた。この實業といふ文字が、この外に在る者は虛業に從事して居るといふことになるので、その實は甚だ妙である。しかるに金錢を得ることは、どうしても此の實業に從事して居る者の方が巧みであるところから、これまで學問の方に在つた者も、次第に實業家に近寄り、政事家も、法律家も皆相擧ひて此方面に近寄り、我も〳〵と互に金錢を握むことに傾いて來

た。その結果は競馬、富籤、相場、甚しきは賄賂のやりとりをしても金錢さへ攫取りが出來、衣食住の美を盡くすことが出來れば、立身、成功と思ふやうになつた。衣食住の美を盡くすことも立身、成功の一分には相違ないが、それは立身、成功より得る一分の結果であつて、只これ丈で立身、成功といはれぬ。まして此れが正當の手段でなく、種々權謀術數を盡くし、己を欺き他を詐いて得たものであつてみれば、忽ちに雲散霧消して仕舞ふから、ツマリ喪身、失敗ということになる。是れは立身、成功といふことの眞義を知らぬから起る誤である。立身といふことに就ては、孔子が、

身體髮膚は、之を父母に稟け、敢て毀傷せざるは、孝の始めなり、身を立て道を行ひ、名を後世に揚げ以て父母を顯すは、孝の終りなり

と云ふて居られるが、是れが眞の立身といふことである。しかしこの立身といふことは、實際はなか〳〵容易なことではない。それ故

孔子も、

十有五にして學に志し、三十にして立つ

と云うて居られる位である。然るに狂句者などか

孔子さん二十九までは チンバ 哉

などと冷笑して居るのは、途方も無いことである。孔子は實に古今唯一の修養家であつて、後人の企て及ぶところではない。世間には堂々七尺の軀を以て、獨立して世に處することが出來ず、大官富豪の庇護によつて生計を立て、甚しきは三十男で父の脛を咬つて居る者が澤山にあるが、かゝる有樣で立身、成功を口にする資格は無い。

富貴は人の欲する所で、何人も之を望まぬものは無いが、是れも程度があつて、ドコ迄が富貴といふ際限は無い。ことに世間は種々の階級があり、人々各其天分があつて、猥りに之を犯すことは出來ぬ。それ故に人々自ら其天分に安じて、其身を立てねばならぬ。孔子も

死生命あり、富貴天に在り

といはれてある。然るに富貴天に在ると聞いて、

富貴若し天の上に在るならば

梯をかけて取らんとそ思ふ

などといふのは、愚の極である。

鴉が孔雀の美麗なのを羨んで、自分の羽翼を抜き去り、死んだ孔雀の羽翼を取つて、それを身につけ、自分は美事孔雀になりおほせた者で、鴉の群を辭して、孔雀の群に入つて見たが、孔雀等は大に嘲笑して、更に交をしてくれぬ。ソコデ復び鴉の群に歸つたところが、鴉の群でも、あんな馬鹿者は相手にせぬがよいといふので、だれも構ふ者が無かつたので、彼の似而非孔雀の鴉は、大いに後悔して悶死をしたといふ寓言があるが、近日日糖事件で奸商より不義の財を貪り、虚榮を張らうとして、縲紲の身となり、或は悶死をした學者や政事家は、皆立身、成功といふことを誤り、自ら喪身したの

であるから、彼の似而非孔雀と異なつたことはない。

二　至誠

『觀無量壽經』に

若し衆生ありて、彼の國（極樂淨土）に生れんと願はゝ、三種の心を起せば、即ち往生せん。何等をか三と爲す、一には至誠心、二には深心、三には回向發願心とある。『中庸』には、

誠は天の道なり。之を誠にするは人の道なり。

とあつて、天地萬物の間に一貫して犯すべからざる道は誠である。この誠を以て日月星辰の運行、山川草木の生滅變化がある。人は萬物の靈長であるからとて、之を犯すことは出來ぬ。若し之を犯したならば、たとひ一時は非理の榮達を計ることが出來ても、遂に失敗するにキマツて居る。しかるに近頃の青年は狼狽に立身、成功を急いで、あらゆる手段を用ひ、自己を好位置に貰りつけんとアセツテ居るが、誠に憐むべきことである。二宮尊德翁は曾て、

年若き者數名居れり。翁諭して曰く、世の中の人を見よ。一錢の柿を買ふにも、二錢の梨子を買ふにも、眞頭の眞直なる、瑕の無きを撰りて取るにあらずや。又茶碗を一つ買ふにも、色の好き、形の宜きを撰りて取るなり。世人皆然り。柿や梨子は買ふといへども、惡しくば捨て可なり。それさへも此の如し。然れば人に撰ばれて聟となり、嫁となる者、或は立身を願ふ者、己が身に瑕ありては、人の取らぬは勿論。其の瑕多き身を以て、上に得られねば、上に眼のないなどと、上を惡しく云ひ、人を咎むるは、大な間違なり。自らかへり見よ。必ず己が身に瑕ある故なるべし。夫れ人身の瑕とは何ぞ。酒が好きだとか、酒の上が惡いとか、放蕩だとか、勝負事が好きだとか、無藝だとか、何か一つ二つの瑕あるべし。隋弱だとか、買手の無き勿論なり。是を柿梨子に譬ふれば、眞頭が曲りて、澁そうに見ゆるに同じ。されば人の買はぬも無理ならず。能く勘考すべきなり。古語に內に誠あれば必ず外に顯は

るゝとあり。瑕無くして眞頭の眞直な柿の賣れぬといふ事あるべからず。夫れ何ほど草深き中にでも、薯蕷があれば、人が直に見付て捨ておかず。又泥深き水中に潜伏する鰻鰌も、必ず人の見付て捕へる世の中なり。されば内に誠有つて外にあらはれぬ道理あるべからず。此道理を能く心得、身に瑕の無き樣に心かくべし。

といふて居る。

井上角五郎氏は兎角の世評もあるが、福澤翁の見出に逢つて今日の立身をした人である。氏は嘗て福澤翁の處に食客となつて居た時、下婢の一人が病氣の爲めに休んで居たので、氏は毎朝早く起きて、食堂の板間を吹掃除して居た。一週間を經た頃、翁が食堂に出て見られると、氏が下婢の代りをして居るので、君はコンナ事を致さなくてもよいに、どうしてであるかとの問に、氏は一週間前から、下婢が休んで居るので間がわたりませぬから、私が代りに吹掃除を致しますといはれたれば、翁は、それは殊勝である。多くの人は、人

の目前では働くが、人の見ぬ處で、自分の役目でもない事をつとめるものは少ない。君は私や家人の知らぬ間に斯く働かれるとは實に感心である。斯な心掛を失はぬやうに致してゆけば、キット立身をすると云はれたので、氏は大に喜び、それから翁の此言を守つていつたといはれていふことが、或る雜誌に出て居た。一寸した事であるけれども、青年の教訓となる。西郷南洲も、

正道を以て行へば、目前に迂遠なるやうなれども、先にゆけば成功は早きものなり。

といふて居る。ツマリ立身、成功は他に秘訣はない。只至誠の二字を實行するに在る。至誠は行ふに六ヶ敷いことは無い。天然自然であるから、これより易いことは無い。しかるに之れが難いといふのは、其心が曲つて居るからである。紅名指の屈て信びないのがあれば、特に痛みもなく、事の缺けることもないけれども、若しこの指を信ばしてやる者があるならば、百里二百里の踏を遠しとせずして、

そこに起いて治療を乞ふ。それは指が人並で無いといふ丈である。指が人並で無いといふことは、斯くまでに心配するけれども、其心が曲つて人並で無いといふても、少しも氣にかけない者が多くある。此れは物の大小輕重を辨へぬ者であると孟子もいはれてあるが、今日の青年が卒業はしても、勤口が無いとか、俸給が少ないとか、コボしながら衣服等の外見ばかりを飾つて、自己の心操の曲つて居るのを直さうとしないのは、皆この類である。

三　虛圓

世間に立つて自己の職業を働いてゆく上にも、能く注意せねばならぬとことがある。それは虛圓といふことである。世間には種々の階級があり、樣々の人物がある。是等の階級。人物と交際するには就て、自己が誠實であつても、他人と交る中に自然に他人の惡風に感染することがあるから、それは注意して避けねばならず、といふて之を排斥してはならぬ。何故といふに、世間は自分一人で立つてゆくことは出來ず、必ず幾多の他人と交際してゆかねばならぬ。しかるに惡いところがあるからといふて之を排斥すれば、勢ひ孤立せねばならぬ。故に先づ交る所の友達を吟味してゆかねばならぬ。

益者三友、損者三友。友直、友諒、友多聞、益矣。友便辟、友善柔。友便佞、損矣。

といふ孔子の語は、朋友の善惡によつて損益があるから、益友を擇んで交らねばならぬことを示したものであるが、

三人行必有我師。擇其善而從之。其不善者而改之。

といふは、此方の注意の仕樣によつて、善惡ともに師となるといふことである。三人といふは、自分が一人で、外の二人の中、一人が善人ならば、それは自ら取つて之に從ひ、他の不善の方は、それを見て改めるといふ樣に致すのである。鯛や鯉は佳肴であるけれども、鱗や、腸や、頭、尾等を除き、肉の善い處を擇び取り、これに鹽や砂糖や酒などを和して調理してこそ、旨く食べられる。若しその肉を

捨て、鱗、腸、頭、尾の惡いところばかりを取つたならば、決して食べられぬ。菜葉は、野生の草であるが、それでも葉の柔かなところを取つて和食物にして食べれば、一度の膳に上ぼすだけの價はあるものである。この考で人に交れば善者惡者ともに、自己の利益となるから、ツマリ此法の注意如何によつて損益を異にするのである。

先代尾上菊五郎(寺島)は其技藝に就て非常に熱心であつたが、一日彼の宅へ惡漢が來て、頻りに惡味な文句を陳べて、ゆすりを云うて居た。門弟共が之を見て、逐ひ拂ふとした處へ、菊五郎が襖を排けて出やうとして之を見付、ソット門弟に目クバセをして、少しの金を與へさせた。スルト惡漢は益す〳〵惡口を吐いて止まぬので、門弟は耐へかねて逐ひ出さうとするのを、菊五郎は猶ほ制止して、惡漢の言語動作を一心に見詰めて居たが、遂に更に若干の金を與へて去らしめた。門弟等は怪んで、何故にアンナ奴に、言ひたい放題を

言はせて金を遣りなさるかと尋ねた。スルト菊五郎は、彼の頭髮、文身、容貌、風采、言語、動作、實に惡漢ゆすりの標本であるから、己れは感心して見て居た。他日舞臺に登つて、アヽいふ惡漢を演る時の模範にしやうと思ふたから、わざと思ふ存分に言はせて見たのであるといふたので、門弟等は其熱心に感服したといふことである。これは只その一例で、彼には這樣な事は澤山ある。苟も這樣な心になつて人に交れば、逢ふ人々悉く人々より利益を受けることになる。

且つ又世間には種々の人があるのみならず、種々の出來事が起つて、一成一敗、榮枯盛衰常ならず、いはゆる人間は七顚八起で、決して順境ばかりでなく、時々逆境に出逢ふことがある。それは丁度大海を渡る船が順風にあひ、又逆風にもあふやうなもので、斷じて免れることは出來ぬ。「有爲轉變は世の習ひ」といふが、實に世間の常相である。それゆえに世間に處するには、最初から世の中は、カ

ウシタものと覺悟を定め、一成一敗、順境逆境に逢うて、自己の心を動かさぬやうにして、その順逆の風に隨ひ、觸れず障らず、自在に棹を執つて渡つてゆかねばならぬ。これは謂はゆる虛圓の士で無くては出來ぬが、その虛圓の境界に至るには、參禪修養が必要である。一休和尙の、

坐禪する祖師の姿は加茂川に
ころび流るゝ瓜か茄子か

といふ歌は、盆祭が濟んで、精靈棚を川に流すを見て詠んだものと見える。その意は、坐禪する僧を嘲つたやうに似て居るけれども、其の實は大いに譽めたものである。瓜や茄子の川に流れてゆくを見れば、石に當り、岩に觸れても障りなく、沈むといへども忽ち浮み出て、沈むことはない。禪者は丁度その如く、世の變遷に遭遇しても、障り無く滯り無きを譽めて、世人が世變の爲めに浮瀨に沈むを諷したものである。『華嚴經』に

世界に處することは虛空の如く、蓮花の水に着せざるが如しとあるが、この不着がすなはち不滯である。不着不滯は實に世海を渡る唯一の浮寶である。ツマリ身を立てるには至誠が肝要で、世を渡るには虛圓が肝要である。維新の革變に遭ひ、至誠を以て彼の大局を全く收めた幕府の忠臣山岡鐵舟が、

晴れてよし曇りてもよし富士の山
元の姿はかはらざりけり

の一首は眞に立身處世の妙訣を示して居る。

九　成功の要訣

一

何時の世、如何なる人でも、自分の思ひ立つた仕事を成就したいと思はぬ者はないが、近來はとりわけ成功といふことが、頻りに世人に喧しくいはれて、やれ成功、それ成功といつて、何か一種の秘術でもあるやうに、「成功」と題する雜誌まで發刊せられ、それが多數の人に愛讀せられてある。ところで之を讀んで見れば、別に瓢箪から駒が出て、灰吹から大蛇の出るやうなことは無い。矢張人々が苦辛忍耐の結果、遂に能く成功をした事ともが書いてあるに過ぎぬ。しかし其の中には種々の事があつて、皆悉く成功といはれぬものも多いのであるが、能く注意して見ないといふと、往々飛んだ間違を生ずることがある。

二

世人の身分、職業も種々様々であるから、その行ひ樣も決して一定にはいはれぬけれども、それは別として、先づ何人も注意すべき點だけを擧げてみれば、其餘は推して知れる。それは一語にいへば、人々自ら人といふ一字を合點することである。といへば、餘り人を馬鹿にしたいひ分であると思ふ者もあるであらうが、

「論語讀みの論語知らず」の諺のある如く、實際はこの「人」といふ字の意義を了解して居らぬ者が、古今英雄豪傑と稱せられる人の中にも少なくない。まして平々凡々者流に至つては云ふまでもない。しからば人といふ字は如何といふに、之を分析すれば、ノしの二字である。このノが一人とすればしが又一人で、ツマリ二人が結合して一人の人が出來て居るわけである。これは人は只一個孤立して成り立つ者ではなく、二人以上結合して、はじめて一人が生存するものであるといふ意義である。社會といふ文字も一人一個でなく、多數の人々が一團となつて居る意義であるが、その社會を形造る要

楽たる人その者も、亦之を分析するときは〳〵の二個より成立て居るとすれば、吾人が社會に處して一大成功を見やうといふには深く考へねばならぬ。

三

近來西洋の個人主義とか、自我發展主義とかいふ説が傳つて來て、人々之を無上の主義のやうに思ひ、一切萬事に之を應用しやうと致して居る者が多いやうである。勿論是等の學説には、それ〴〵の道理もあることであらうが、その道理を了解して、その通りに實行する者は、千百人の中に一人も無い位で、滔々たる多數の者は、只その名目だけを見て、自己一人の思ふ通りに道りつけることのやうに思うて居る。そこで一時好い機會に出遇うて、一事甘く出來るといふと、最早世間は此の通りに道つてゆけるものと獨合點して、前後左右も顧ず、他人の利害得失を考へず、ズン〳〵と我儘勝手を押し通してゆく、けれども勢力といふもの何時までもツヾクものでない。

それにサウいふ風の道方は無理が多いので、他方に怨んで居る者があり、又自己に直接に利害を感せずとも、その道方を心惡く思うて居る者があるから、何かの機會に乘じて、是等の中から顯れ出でゝ、その我儘者を退治するにキマツテ居る。その時は九仞の功を一簣に缺ぐといふことになつて、その失望落膽は實に憐むべきものである。近來世の謂ゆる成功者と稱せらるゝ人々の中には、頗る此類が多いやうであるが、是れ皆「人」の字を了解しない結果である。

四

人は智、情、意の三つがあつて、この三つが圓滿に發達した者が、聖人とか君子と稱せられるのであつて、彼の偉人傑士とか、英雄豪傑とかいふものは、この三つの中の何れかの發達が不充分なものである。一事を成するはソレ丈の智識を要することは勿論であり、又それを成し遂げるまでには、幾多の忍耐を要し、堅固の意志をも要するが、是れは皆自己に關することである。この外に他人の感情とい

ふものを察してゆくといふことが尤も必要である。何故といふに、如何なる堅固の意志で、如何なる明白の智識で、事を行うとしても、自己一人で成せるものではなく、必ず他人を相手にせねばならぬ。然るに他人の感情を顧ずに遣つてゆけば、その事の善悪利害に關せず、他人が納得せぬから致方がないのみならず、甚しきに至つては、之を妨害し、或は之を破壊して仕舞う、是れ卽ち失敗である。そこで世の中に立つて事を成さうとするには、是非他人の感情を察して、その感情に背かず、悉く自己の意志に服從するやうに注意せねばならぬ。「人は感情の動物なり」といふ語の通り、時としては非常に利害に敏なものであるが、その感情の激發した際には、利害得失を顧ずに突進するものであるから、之を處する術を知つて居らねばならぬ。かくいへば、他人の感情のみに心を用ゐて居ては、自己の意志を行ふことは出來ぬから、ツマリ他人の奴隷となることになるといふ向もあらうが、決してさうではない。自己を大きくして、一切の

他人を自己の中に包容してゆくのである。若しさうでなければ、一家すらも能く治めてゆくことは出來ず、まして天下國家の大事を成すことは猶さら出來ぬ。

五

余は一昨年下僕に命じて、庭木を一本移さしめた。ところが四五日經る中に、花の色が次第に褪めて、枯れさうになつたので、植木屋を呼んで之を見せたれば、是れはイケマセン。無理な植方が致してありますと云つて、土を堀つて見れば、木の根が土に著いて居ない。うれで肥料や水を與へても、少しも効が無いのである。うこで植木屋は其の土を能く堀り、充分に水をやり、根を揃へてソツト植え直したが、うれから再び花も葉も勢づいた。彼の植木屋がうの木を取扱ふ樣を見れば、恰も慈母が赤子を取扱ふやうであつたから、余は大いに感じた。無草木でさへも、只人間の力まかせに根を引き拔いて移したばかりでは、遂に枯れて仕舞うから、矢張草木の情を損せぬ

やうに致さねばならぬといふことを悟つた。又四五日前にも、途中で一兵士が悍馬の荒れたのを引き廻して居たが、途に馬が飛び出して逃げたので、兵士は一生懸命に馬を馳せて追ひかけた。しかるに先から、肥料取の若者が來かゝつて、彼の逸した馬をチヨイト捉いて、鼻頭を二つ三つ摩でゝやると、馬はチヤント止つた。うこへ兵士が遂うて來て、若者に禮を陳べて引いて去つた。この時に余は亦彼の植木の時と同じ感をなした。馬を御するにも只みだりに力まかせに止めやうとしてもゆかぬ。矢張馬の情を損せぬやうに致さねばならぬといふことを知つた。言語の通せぬ牛馬でさへもかやうであるから、同等なる人類を相手にするには、猶更先方の情を察することが必要である。

六

ナポレオンは千古の英雄で、一兵士より起つて佛國の皇帝にまでなつた位であるから、「不能」の字は辭書より引き去つてよいと叫ん

だうであるが、彼れは其意志の強堅なことは慥くべく、亦其智識の聰明なことも非常であつたが、只この人の情を察するといふことが缺けて居た爲めに、無類の失敗を致したのである。即ち極端なる個人主義、極端なる自我發展主義であつたからである。同じ戰爭を致して勝利を得た英雄でも、ワシントンの如きは、かやうな失敗をせずして大業を成し遂げた所以は、この點がナポレオンと全く反對して居たからである。

七

織田信長、豊臣秀吉、徳川家康三人の事に就ては、世に定評もあることであるが、同一事件に對しても、彼等三人の性質が分明に知れ、且つ其成敗の分かるゝ所以も察せられる。天正十年武田勝頼が天目山に於て討死した時、いよ〳〵檢首といふことになり、信長は將机にかゝつて勝頼の首を見て、「いかに、汝が父非義非道なりし故、天の譴のがれがたく今かくなりぬ。信玄一度京に趣かんと志しける

を聞く、汝が首を京におくり、女壻に見しられよ」と痛罵して、首を家康の許に送つた。すると家康は將机にかゝつて居たが、武田勝頼の首と聞いて、將机をおりて、「偏に若きゆゑに思慮なくかくならせ候」と、禮儀正しくいつたので、之を傳へ聞いて、甲斐信濃の士等は德川に心を寄せるやうになつたといふ。又勝頼亡びて後ち信長、信玄の舘を見んと馬を乘り入れんとしたが、馬が進まなかつたので、遂に引返したといふ。しかるに家康は其後甲州を治むる時に、信玄の舘を覽んと、舘の門外に來り、馬を下りて門に入つたといふ。些細の事なれども、二人の行爲が如何にも能く其性質を顯して居る。

秀吉は此時未だ筑前守であつて、西國毛利氏を攻めて居たが、勝頼亡びて甲州が平定したことを聞き、大息して、「あたら人を殺したる事の殘り多さよ。我れ軍中にあらば、しひて諫め申して、勝頼に甲信二州を與へて、關東の先陣としたらんには、東國は平おしにすべきに」と痛惜したといふが、この一言は如何にも同情があるけれど

も、是れは彼れが未だ功成り志滿たぬ時であつたからである。彼れは關白となつてから、其性行が全く一變した。彼れが利休の女を懸想して、利休が之を拒絶したのを恨み、利休の木像が大德寺山門に置いてあつたのを無禮なりといつて、茶器を貪つて私利を貪つたといふの理由を以て、利休をして自殺せしめたことや、又秀次が高野に逃れ、剃染して自ら非を懺悔したにも拘らず、遂に割腹せしめ、剩へ三十餘人の妾を悉く戮殺して、「畜生塚」を立てさしめたことの如きは、何たる無情の甚しきことぞ。之を家康が一寺を建て勝頼の冥福を祈り、又石田三成の一子を赦して出家せしめた等に比すれば、其相異天淵も啻ならずである。要するに三人の成敗は、他に種々の原因もあらうが、人の情を盡くすと、盡くさゝるとに在るは、疑ふべからざることである。

八　今日の成功を說く者、皆忍耐、勉強、敏捷、怜悧等が其要訣だと

いふ。勿論是等は必要であるけれども、たとひ是等が備つて居ても、苟も人の情を失ふては、たま〳〵失敗を招く基となるだけのことである。世の徒らに金力、權力のみを崇拜して居る輩が、往々一朝にして失敗するのは、此の要訣を忽緒に付して居るからである、故に娓々陳言を述べたのである。

十　出世の話

立身出世と云ふことは、僧俗共に結構の事と致してあるが、是れば俗人ならば、學問技藝が出來て高位大官になるか、或は戰爭に出て功勞があつて、位階勳爵が高くなつたとか、又は殖產工業や貿易商賣によつて多くの財產を得たとかいふ事に考へられてあり。僧侶ならば學問修行が出來て、禪師僧正にでもなり、大地名藍に住職をした事のやうに思はれてあるが、これは「身を立て世に出でる」と云ふ意義である。しかし人は只學問技藝が出來、位階勳爵が高まり、金銀財寶が澤山に出來たといふばかりで、眞實の快樂を得られるものではない。かやうな順境に處して、之を守り保つてゆくことが出來ねばならぬが、之を守り保つてゆくには、此等の有形物を支配するところの主人公即ち各自の安心が堅固であらねばならぬ。若しこの

安心が堅固で無かつたならば、一朝轉變に遇つて、位階財產等を失うた時には、位階が高く、財產が多いだけ、それだけ甚しく苦痛を感ずることになる。ましてや天下の人悉く皆高位大官紳士豪富になると云ふことは出來ぬが、これ等の人々は如何にして快樂を得ることが出來やうか。イヤまだ〳〵生死と云ふ一大事がある。即ち「死ぬる」と云ふ最も恐ろしい事がある。

今までは人のことだと思つたに

已れが死ぬとはコイツたまらん

といふやうなことになつて、七轉八倒する。かうなつては、これまでの立身出世も、一時にメチヤ〳〵になつて仕舞ふ。それであるから「世に出ろ」と云ふことばかりでなく、一歩進んで「世を出る」と云ふ境界に入らねばならぬ。世を出ると云ふは、世間を超出する義であるが、超出するといふても、鳥が籠の中から飛び出るやうなことではない。しからばドウイフことであるかといふに、先づ「世間と

は何ぞや」と云ふ問に對して、明晰に答辯がつかねばならぬ。トコロデ此の問に對して、世はどう云ふ義、間はどういふ義と、分明に了解して、答の出來る者が少ない。「世間知らず」といふ語は、何人も常にいふけれども、さういふ其人自身も矢張世間知らずが多い。成佛、大悟、正覺などといふても、ツマリ此の世間を知りぬき、それを超出するに過ぎないのである。其れ故に「出世間」といふことが即ち出世である。

二

そこで先づ世間の字義から解釋を致しますが、世間の世の字から解釋すると、世の字は一の字を書いて竪に三本の棒を引いて、三本目の棒を右に曲げて世といふ字になる。この棒は三本に限つたわけではないが、假りに三本に致して第三本目の棒を右にまげて、未だ幾本もあるけれども、これで止め置くといふことを示して居る。それは一個の物體あれば、過去、現在、未來と云ふ時間がある。時間

は過去現在未來、過去現在未來と、常に遷り代つて居て、少しも止まつて居ないものである。一秒時間と云へば、極めて少しの間のことであるが、佛教では一刹那といふことを申して、この刹那は一秒時間に六十刹那あるといふ位で、極々少ない時間である。その極少ない時間の刹那々々に、總ての物は生滅變化すると云ふので「刹那生滅」といふ語がある。古人は「世は遷流の義なり」といふ解釋をつけて居るが、いかにも川の水が常に流れて少しも止まらぬ處を遠方から見れば、一匹の練を引いた樣に見えるけれども、決して練の樣にチャンとして動かぬのではなく、始終流れ遷つて少しも止まつては居らぬ。世の中は丁度それと同樣に、生滅變遷窮りないものである。

世の中は三日見ぬ間に櫻かな
散る櫻殘る櫻も散る櫻

などといふがあるが、十七字の中に世の字の意味を説明して居る。

といへば、諸君は直に僧侶説法の常套語かと思はれるか知らぬが、實際の世の中の眞相は遷流轉變窮り無いのであるから致方がない。イヤ遷流轉變、生滅無常で無かつたならば堪まらぬ。例へば、一人の兒が生れると、時々刻々日々夜々に遷流轉變して次第に發育生長するからこそ、幼兒が少年となり、少年が壯年となる。若し常住不變であれば、何年經つても赤坊であらねばならぬ。又生れて出た時は、母親の乳を吸うて、腹がふとくなれば眠むる。その間に大小便をすると啼くことより、外には何の事をも知らぬ。「百日の寢つ兒タレッ兒」と云ふ通りであるが、これも何時までも寢てはタレ、タレては寢るばかりで、少しも生長せなかつたならば、それこそ大變である。しからば時々刻々に遷流轉變するのが、世の中の常相である。私も生れた時から、頭が禿げたり、胡麻鹽鬚が蓬々と生えて居なかつたそうである。勿論コンナ容で母の胎内から飛び出した日にや大變であります。矢張オギャ〳〵と啼いて、母の乳房をシャブルより

外のことは知らなかつたそうですが、次第に年を取るに隨つて遂にこんなになつたのであります。

花の春こんな爺じや無かつたに

と云ふ句の如く、幾ら悔んでも致方がない。しかし是れが私の常相であるかと云ふに、そうではない。次第に白雪滿頭というやうになり、年病になり遂に棺に入るより外はない。これは私ばかりではない。

絶代、容華歸塵土。千秋、氣節付桐棺。

といふ或る人の句の如くで、何人も免れることは出來ぬ。しかるに彼の小野小町の如きは、その容色の美麗なるを恃み誇つて、

面影のかはらで年のつもれかし

たとひ命にかぎりあるとも

と詠じて、その容色を保たうと願うたけれども、遂に、

花の色はうつりにけりな徒に

我が身世にふるながめせしまに

と嘆息した。只人間の生、老、病、死の四相遷流があるばかりでなく、萬物皆然りである。彼の弘法大師の作られた「いろは」の今樣に、

色は匂へど散りぬるを。我が世誰れぞ常ならむ。
有爲の奥山今日越えて。淺き夢みし醉ひもせす。

と云ふ四句は「涅槃經」

諸行無常。是生滅法。生滅々已。寂滅爲樂。

の四句を和譯したものである、彼の、

年々歳々花相似。歳々年々人不同。

の句は詩としては面白いけれども、全く眞理で無い。向島の櫻花も、明治十五年頃に植えた時分は、丸さが一二寸位のものであつたが、三十年後の今日では彼のやうに大きくなつたので、決して年々歳々

花相似たりでは無い。

青山常運歩。石女夜生兒。

といふ句は、禪者が鹿爪らしく講釋するけれども、これも事實であ
る。「青山元不動。白雲自去來」の句は、一見してその意を解するこ
とが出來るが、この青山が常に歩を運び、石女が夜兒を生むといふ
ことは解せられぬやうに思ふが、それは山や石は不動であると思ふ
からである。能く〳〵眼をつけて見れば、山も石も時々刻々遷流轉
變して、活動止む時は無い。之を物の生、住、異、滅といふ。イヤ
この萬物を容れて居る地球も矢張同樣で、地球の出來初めは、※今日
と大いに異なつて居たといふ。人間が地球上に發生してからも、既
に二十萬年も經つて居るといふが、その前後何程の變化があつたか
知れない。只一年の內でさへ、春、夏、秋、冬と四季陰陽の變化が
あつて片時も止まつて居ないのだから、幾千萬年の長い間の變化は、
到底測られぬ。それから其熱を發して太陽と同樣になり、其の熱が

サメテ消炭のやうになり、又次第に太陽と同樣となるといふ工合に、
始終轉變して少しも止まつて居ない。これを世界の成、住、壞、空
と云ふ。かくの如く、人は生、老、病、死、物は生、住、異、滅、
年は春、夏、秋、冬、世界は成、住、壞、空と、名は異なつても、
いづれも遷流轉變は免れぬ。しかるに『平家物語』の
祇園精舍の鐘の聲は。諸行無常の響きあり。
娑羅双樹の花の色は。盛者必衰の理を顯す。
などの句を讀んで、諸行無常は、佛者が悲觀厭世の語として、眞理
と思はれぬ向きが多いけれども、遷流といひ無常といふは、停滯の
反對なる活動である。世は停滯不動でなく、常に轉變活動して居れ
はこそ、愚者も學べば賢者となり、貧者も働けば富者となり、弱者
も撰生すれば強者となり、病人も醫療を加ふれば全快するのである。
若し一定不變であるならば、貧者は永久に貧者、愚者は一生愚者、
病人は生涯癒えずといふやうに、誠に不都合千萬である。しかるに

幸に無常變遷であるから、趣味もあり愉快もある。それ故に無常變遷といふことは、強ち悪く思ふべきでないが、兎に角「世」といふ文字が、無常變遷であるから、この理を能く〳〵合點すべきである。

三

間といふ字は、門といふ字の中に日といふ字があつて、譬へば、土間、客間、茶の間、居間、寢間、などといふ熟語がある通り、一軒の家にも、シキリのあることであるが、家ばかりではなく、何物でも此の間のシキリといふものがある。先づ萬物をくるめて物、心といふが、物といふ中に動物、植物と分れ、動物の中に人類と禽獸とわかれ、人類の中でも、白皙人種、黄色人種、黑色、赤色とわかれ、黄色人種の中でも、支那人種と日本人種とわかれ、日本人種の中でも男女、老幼、賢愚、強弱、貧賤、貧富とわかれて、實に千差萬別である。古人が「間は差別の義なり」と解釋して居るのはこの理である。

「箱根山籠に乘る人かつぐ人その又草鞋をつくる人」と云ふ語もあるが、實に此狀態をよく寫して居る。今一軒の家に就て見ても、夫、妻、兄、弟、姉、妹、僕、婢、或は老人夫婦もあると云ふやうなわけで、皆その年、その人柄、その位置が違つて居るから、それ〳〵世界が違ふ道理である。又一身に就て見ても、耳目鼻口の四つがあり、兩手に十指、兩足に十指があり、腹の中にも腸胃肝膽を始めとして種々なものがあつて、皆各その働きを異にして居る、しかのみならず肺病患者の痰の中には、無數のバチルスが居るといふことである。かくの如く一個の物體の中にでも種々樣々な物があつて、各々その働きを異にして居るから、甲者の世界は乙者の世界と違ひ、乙者の世界は丙者の世界と違ふ。例へば、蠅が天井に止まつて吾々人間を見下して居るが、吾々は蠅が顚倒になつて居ると思うてをるけれども、蠅の方では人間は顚倒になつて居ると思うであらよ。鱗ある魚類の世界と、翼ある鳥類の世界と違ふのみならず、同じ鳥類でも、

鷄寒上樹。鴨寒下水。

の古語がある如く、世界が違うて居る。人もその通りで、同じ酒でも、上戸は之を飲んで喜び、下戸は頭痛や眩をすると云ふやうに、嗜好が違へば、その物の價値が違ふ。それであるから、男子と女子、貧者と富者、學者と無學者、老人と幼童、みなそれ〳〵別々に世界を有つて居るのである。この重々無盡の差別の有様を問といふ。かく竪に無限の時間があつて遷流窮りなく、横に無盡の空間があつて差別涯り無いから世間といふたのである。

四

しかるに凡夫は此の無常變遷窮りなく、無盡差別涯りなき世間に立つて、自ら常住不變の念を起し、一個孤立の考をなし、貪欲、瞋恚、愚痴を生じて七顛八倒して居る、之を「世間知らず」と云ふ。寢るにも飯を喰ふにも、客間にも居間にも、タヲタ一間しかない九尺二間の裏店住に、夫婦さしむかひの生活をして居ながら、髪剃や

出及庖丁をふりまはして、死ぬの殺すのと、血塗れ騒ぎをして居る連中は、朝から晩まで日露戰爭をやつて居るやうなものであるが、斯様な連中は、たとひ一人住をしても、矢張世の中が思ふ様にならぬとモガク、

兎角浮世はまゝにならぬ
まゝになるのは米ばかり

といふ句があるがその米さへ巧手に炊かなければ、黒焦になつたり、半熟になつたりする。さうすれば直に、

まゝにならぬとお櫃をなげりや
そこらあたりは飯だらげ

といふやうなことになつて仕舞ふ。イヤこれは只裏店住の者ばかりではない、隨分高位大官、博識通覽の人でも、この世間と云ふことを知らぬ連中は、一生眞實の安樂は得られぬ。ソコデこの世間は斯くもウルサイものであるから、そこを飛び出るの必要があるので「出

世間」と云ふことがある。しかし此の出の一字で肝要で、この解釋を誤るといふと、トンダことになる、この世がウルサイと云うて、世間を遁れて深山幽谷に入り、世人と交りを絶ち、猿や鹿を相手に暮すものがある、之を遁世者とか、仙人とか云ふが、之は眞の出世と云はれぬ。明の洪自誠の語に、

出世の道は即ち世を渉る中にあり。必ずしも人を絶ち以て世を逃れず、了心の功は即ち心を盡す內に在り。必ずしも欲を絶ち以て心を灰にせず。

といふがある、是れが眞の出世の道である。「華嚴經」に、

佛心豈に他あらんや。正覺世間を悟る。

とあつて、決して世を逃れることではない。如來十號の中に「世間解」といふがあつて、眞實に世間を了解するのが佛である。然るに出世の道は僧侶の行ふ所であると心得、僧侶もそんな考へを起して、出世間であるからと云ふので、形體から衣食住共に俗人と異る

べきであると思うて居るが、それはヨシとして、矢張り此世間に生活して居るので、ドコへも外へ飛んで出るわけではない。イヤ無限の空間、無限の時間の外に飛び出しやうのあるわけがない。しかるに僧侶が世人を敎導する職務を有つて居るにも拘らず、一向に世間の事を知らず、徒に經論を讀み、坐禪觀法や、念佛禮拜、加持祈禱ばかりをして、それで世人の迷雲を拂ひ、苦境を脫して樂地に達せしむることが、ドウシテ出來やうぞ。これ等は世間を出たと云ふのではなく、最初から世間を知らぬといふものである。若し出たのであると云ふならば、「超出」したのでなく、「橫出」したのである。釋尊の「覺世間」「出間解」といふは、飽くまで無常遷流、無常差別であると徹底了解覺悟して、それに拘泥執着せず、その遷流差別の現象のまゝが、即ち一味平等の本體を離れず、一味平等の本體の上に、遷流差別の現象があるのだから、この間に取捨憎愛すべきでないと透觀せられたので、之を眞の「出世」

といふ。ヅマリ世間は時間的に無限の遷流あり、空間的に無盡の差別があるが、その遷流差別に迷惑せられず、超然として遷流差別の上に卓出して、一味平等の境界に居り、さうして自由に遷流差別の世間に活動するものである。そこを古人が、

終宵峰の嵐にくだかれて
　散る玉ごとに宿る月影

と詠んで居る、これは世間差別の上であるが、それを、

武藏野の草葉の露に影みえて
　月は一つにかへるあけぼの

と平等の上に歸して居る。この平等の上に止まらずして、更に差別の働をなしてゆく處を、

秋の夜の只一つなる月影も
　萩の葉ごとにやどる白露

と詠んで居る。しかるに出世といふことを誤解して厭世、遁世と心

得、甚だしきは早く死んで他方世界の極樂淨土といふ一定の場處へ往生して、寢て居て五欲の樂を享けたいなどと、途方もない考へを起すものが澤山ある。無學無識の僧侶は今日でも出世間と云ふことを誤解して、世間を解するとか、覺るとかいふ眞義を知らぬから、門徒ものしらず、禪宗せになし、法華ほねなし　などゝ嘲られて居る。これは何にも此三宗の僧侶ばかりではない、各宗の無識の僧侶は、皆この嘲を一身に受けねばならぬ。斯る淺ましきことで、ドウシテ世人を敎化することが出來やうぞ。法華經に、

三毒を滅し三界を出づ

とある。三毒とは貪欲、瞋恚、愚痴で、この三つは吾人の身心を害毒するものであるから三毒といふ。三界とは欲界、色界、無色界で、即ち世間のことである。この世間を出るといふは外ではない、たゞこの三毒の煩惱を滅盡するのである。洪自誠又曰く、

世人榮利の爲めに羈縛せられて、動もすれば塵世苦界と云ふ。知

らす雲白く山青く川行き石立ち、花迎ひ鳥笑ひ谷答ひ樵謳ふ、世亦塵ならす、海も亦苦ならす、彼れ自らその心を塵苦にするのみ」と、是れが眞の出世法である、然るに世人その塵苦の心を以て、名利を望み、名利に束縛せられて居るを出世と心得、或は厭世、遁世を出世と心得て居るのは、皆共に間違つて居る。古人が、

惜しや欲しやと思はぬ故に今は世界が我物じや
虚と世界をくだいて後に寶の世界に住むがよい

などと歌ふて居るが、こゝらで、「淺き夢みし醉もせず」と大覺して活動したいものである。

五

要するに世俗の「出世」といふことは、うの寶動もすれば苦海に沒する媒となるので、遂に醉生夢死を免れぬから、佛敎の眞の出世と云ふことを悟つて、うの上で世を厭はず、世を遁れず、利民濟世の洪業を成就することが、大丈夫の志操であらねばならぬ。

十一　太平樂話

一　はしがき

天下太平、五穀豊饒といふ語は、昔から云ひ來つて居る芽出度い言葉であるが、昨年は非常な豊年で、五千萬石も米が出來たといふことであるから、今年は世間は何となく長閑になつて、初春より人の心も自から平和で、眞に天下太平の氣象を見ることが出來るであらう。しかし人々が眞の太平の樂を享けることの出來る、出來ないといふことは、第一は人々の心の持ちやうにあるから、その心の持ちやうを御話し致しませう。

二　長閑さよ願なき身の神詣

といふ古句は、十七字の中に自から長閑さの趣味があらはれて居る。初春には惠方詣りなどというて、元日早々から諸方の神社佛閣へ參詣するのは、我が國古來からの美風である。サヲその神詣に附

いて、心得が違ふといふと、折角の美事が甚だ忌はしき事になつて仕舞ふ。しかるに神佛に參詣する人々の樣子を見れば、多くは只自分の利益ばかりを祈り、しかも甚しいのは人に向つては言ふことの出來ないやうな、我欲を遂げさせて貰はうといふ心から祈願する者がある、かゝる心から御詣をする者は、遂に神佛を欺くやうな事をすることがある。

昔し或る所の貧乏人の嗚が難產で、ウン〳〵うめき苦しみ廻るを、亭主が堪へ難く思ひ、俄に裏の井の側へ立つて裸になつて水垢離をとり、讃岐の金毘羅樣を祈り、南無象頭山金毘羅大權現樣、嗚が難產を助け給へ。たとひ小兒の命は無くとも、嗚が命を助け給へ。その御禮には此寒中裸で日參いたしませう。若し又母子とも無事で身二つになりましたら、その御禮には金の鳥居をこしらへて御神前に建てませうと、一心になつて祈る聲を、障子の內から嗚が聞いて、是れはけしからぬ事とおもひ、苦しい中から云いますには、申し〳〵

こちの人、いかに神樣がものをいはつしやらぬとて、そりやあんまりの立願じや。爰から讃岐の金毘羅樣へは二百里餘りもあるといふに、寒中裸で日參がどうしてマア出來るものか。其上に又朝喰ふ當もない貧乏な此內から、金の鳥居がどうしてマア出來るものでござらうぞと、顏をしかめていひましたら、カノ男が小さい聲で、ヱテサテそちは合點のわるい。おれが爰から斯ういうて、金毘羅を欺すうちに、そちは速く產みおれといふたと申す話があるが、大抵凡夫の境界はマア其位が多い。かやうな心樣では、何ほど神佛に祈願をしても、參詣をしても、利益のありやうは無い。

支那の黃檗希運禪師といふは、非常な見識の高い方で、問答の節に宣宗皇帝の橫面を三度も撲つたといふほどの方であつたが、頻りに佛樣を禮拜せられて居たので、皇帝がその理由を尋ねられたら、「佛に着いて求めず、法に着いて求めず、衆に着いて求めず、常に禮することを是の如し」と答へられた。皇帝の考では、佛、法、衆に求め

る心が無かつたらば、禮拜をするには及ぶまいと思はれ、貰棄ほどの大善智識なれば、求むる心はあるまいに、なぜに佛を禮拜せられるかといふのが疑問であつた。しかるに貰棄は、求むる所は無いが、禮拜はこの通りに致すといはれた。この求むる所なしといふは、即ち願無き身である。神佛を禮拜するは、神佛の無垢清淨の御心を頂く爲めである。しかるに不潔極まる身自負我欲、而も神佛を欺いて利欲を得やうとして、元日早々から神佛に參るのは、三五の十八、飛んだ間違である。一年の計は一月に在り、一月の計は一日に在りといふ、その一日から貪欲の惡魔に責められて驅けまわるやうでは、一年中片時も太平の樂を得ることは出來ぬ。それゆえ此の願ふ心求むる心の貪欲を去つて、清淨無垢の身になつて、神佛に詣づるのが、實に太平樂の本である。しかるに神佛に詣づるのは、何か祈り求むる所あるが爲めと心得、神を拜せず、佛を禮せずして、却つて他人の禮拜するを嘲り笑ふ者が、學者識者といはれる連中に多く見

受けられるが、是れはその心は傲慢で、自己の修養、人格の向上といふことを知らないのであるから、決して稱すべきではない。それ故に求むる所無くして佛を禮し、願ふ所無くして神に詣づる。佛を禮し神に詣づるも、求むる所無く願ふ所無しといふ長閑な身となるのが、乃ち一生太平無事の境界であるといふことを合點すべきである。

三　手折らるゝ袖にかほるや梅の花

これは春まだ早きに路の邊に咲き匂ふ梅の花を見ては、何人も一枝ほしやと思ふ心から、ツイ一枝を手折つて家に歸らうといふ氣になつて、その枝を手折ることがある。その時情無き梅の花とて、その手折られたのを怒りもせぬのみか、却てその手折つた人の袖に香を放つて居ることを述べて、人も他より怨を受け仇をせられても、それに對して瞋恚の心を起さぬのみならず、却つて仇に報ゆるに德を以てすといふ寬仁大度の心で、人に交り世を渡りたきものであること

を諭したものである。なるほど一時の怒で、人を苦しめた時は、チヨットの間は、胸が爽然としたやうに思はれるが、それは眞に瞬間のことで、直ぐその後から惡るい事を致したといふ念が起つて來て、夜もヲチ〳〵と寐られぬほど氣のやすまらぬものである。之に反して他より不意の害を受けた時は、一時は甚だ口惜しく殘念なもので あるが、その時ヂット堪忍して、アヽ、彼の人は何といふ亂暴の事をするであらうか、アヽした心で人に交り世を渡つてゆくならば、年中いかほど心苦しいことであらう、さて〳〵不愍な者である、ならばアノやうな心を翻して、安穩な日送がなるやうに致してやりたいものであるといふ心を起せば、口惜、無念の心は忽ちに消え失せて、胸中自から清風の起るやうな氣持がするものである。丁度六月の炎天に路を歩き、非常に喉が渴いて居るとき、一杯の氷水を飲めば、忽ち涼しい氣持がするけれども、それはホンの一時のことで、暫く以前より更に苦しく難儀であるが、之に反し

て熱い湯を飲めば、その時は汗が出て苦しいやうであるけれども、暫く立てば忽ち清涼の氣が身內に起るやうなものである。

昔し支那唐の代の于頔といふ人は、詩文も能く出來た人で、天子の寵遇を受けて觀察史といふ役をもつとめた方であるが、一日紫玉禪師といふ高僧に對して、『觀音經』の中にある「黑風吹其船舫、漂墮羅殺鬼國」といふことばは、どういふことでありますかと問はれた。この羅刹鬼國といふは、人を捉つて食ふ惡鬼の住んで居る國といふことで、黑風がその乘つて居る船を吹き立てゝ、恐しい羅刹惡鬼の國に漂ひ墮つるといふことで、その羅刹鬼國に墮つるとは、どういふことであるかとの問である。紫玉禪師は、「この野郎、そんな事を尋ねて何にする」と一喝せられた。スルト于頔は勃然として顏色をかへた。之を見て禪師は、「ソレ〳〵それが即ち羅刹鬼國に漂ひ墮ちたと申すものじや」といはれ、于頔は忽ち惡鬼羅刹として外にあるのでなく、自己の一念に在ることを悟つたと申すことである。

又支那の劉寛饒といふ人は、至つて寛大温和の性質で、曾て家内の人にも怒つたことが無いので、その夫人が下婢に云ひつけて、何か粗相をした振りをして怒らせて見度と思ひ、正月元日の朝、衣冠を着けて朝廷へ年賀に出頭する前に、下婢が御膳の給仕をしながら、誤つて汁椀を覆した振をして、盛服の上にサラリと汁をコボシて濡した。大抵の人ならば、非常に立腹して叱りつけるのであるが、劉寛饒は少しも動く様子なく、其方は何處火傷でもしはしなかつたかと、自分の裝束を穢されたことは心に留めずして、却つて下婢のことを心配して尋ねられたので、夫人と共に主人の堪忍の強いことに感心したといふことである。かやうな心持で居れば如何なる事に出逢うても、心を動かすことの無いのみならず、常に春風に梅花の匂ふが如き有様であるから、その敵までもその徳に感服するやうになる。

四　雪の日やあれも人の子樽拾ひ

明の洪自誠といふ人の言に「家に居るに二語あり、曰く、惟恕なれば則ち情平かなり、惟儉なれば則ち用足る」といふことがあるが、この恕といふはオモヒヤルと訓む字で、謂ゆる「我が身つめて人の痛さを知れ」の義で、この心さへあれば一家は圓く治つて太平である。一家の太平は即ち一國の太平であるが、全うすることの出來るのは、惟恕の一字であると云はれたが、佛敎の慈悲といふのも即ちこの恕である。この俳句は雪の降る日に酒屋の小僧が、饅頭笠を着、素足に草鞋で酒樽を持つて華客の家を廻つて居る樣を見るに附け、ア、あれも人の可愛い子であるのに、かゝる寒い日に使歩をするのは、さぞ寒いことであらふといふ恕の情を述べたものである。

是れにつけて、昔の話がある。晋の陶淵明といふは名高い賢者であるが、我が子を修行のために別荘へ一人住せて自炊させて置かれたところ、其年も追々寒空にもなつてくれば、さすが恩愛のかなし

さ、我が子の自炊するを不便な事に思はれ、一人の小男を抱へて遣りました。その時彼の子にいうて遣つた書簡に、

汝旦夕の費、自ら給することは難しと爲す。今此の力を遣りて、薪水の勞を助けしむ。亦人の子なり、善く之を遇すべし。

と書いてやられた。その意は、其方も此頃は朝夕の食ひものを自炊にせらるゝは嘸難儀にあらうから、今この小男一人かゝへて遣るほどに、山に登つて薪を樵つたり、谷におりて水を汲んだりする事は、此者に云ひつけてさせられよ。しかし又この者も、親の爲めには矢張可愛い子じやほどに、その親の心には、丁度只今此方が其方を不便におもふやうに、不便におもふに違いはないから、その心根をおもひやり、隨分いたはつて、あしらうて遣うてやられよといふのであるが、このこゝろを讀んだ吉川惟足の歌に「こゝろせよ遣ふも人のおもひ子ぞ我がおもひ子に思ひくらべて」といふのがある。

五 元日や發にちかき大晦日

一夜明けて元日となれば、昨日まで四苦八苦にせめられて、目のまはるほど驅け奔つて居た者も、四方の樣子一變し、獅子舞大皷や笛の聲、萬歳、鳥追の往來、逢ふ人々も屠蘇機嫌の笑顏にて、スツカリ新しい天地に出でたやうな心になり、アゝ長閑な春であると、思ふ途端に、グツスリと氣がゆるみ、「元日や又うか〳〵の初めかな」といふ句の通りになつて、何時かしらぬ間に日月は過ぎ去つて、又も大晦日に至つての四苦八苦が大抵凡夫の有樣。この油斷が我々を苦しめる大敵であるから、「油斷大敵」の諺がある。外より來る禍は如何樣にも防ぐことが出來るが、自己の油斷より來る大敵は致し方がないから、元日早々から油斷をせぬやうにして、一年中太平の樂を享けるやうに心掛けねばならぬ。

寛永年中に永井信濃守尙政といふ人、しきりに昇進して寵任せられたが、一日時の元老たる井伊掃部頭直孝に遜逅ひ、拙者は弱年の身を以て、特別の寵恩を蒙り、重職をつとめ居りますのは、誠に恐縮

の至りでありますが、閣下は御老功のことでありますれば、若し拙者共に心得にもなる事御心附でありますなら、何卒御教示下されるやうにと申入れると、掃部守は大に感心して、それは奇特な御心得である。いかにも一つ存じ居る事があるから、御傳授申しませう、さりながら是れは大切な事であるから、輕卒に申上げることは出來ぬ。眞に聞きたいとの思召ならば、拙者の宅へ御越下さるやうといはれたによつて、日を定めて禮服を着して、掃部頭は對面挨拶の後、世話にいふ「油斷大敵」といふことは、定て御承知であらう。拙者が傳授といふは外にはこれなく、只此の一言であります。必ず御忘れなさらぬやうといれたと申すことである。この諺は何人も能く承知して居るところであるが、多く等閑に聞過ごして、心を留める人がない。それであるから毎度油斷して過失を仕出來しては、臍を噬むの後悔をするものが多いのである。掃部頭は常に油斷を禁じて身に近づけぬ心から、眞實に其事の簡要なることを知つて居らるるゆ

えに、この諺を大切の事として、信濃守にも傳授せられたのである。その上輕卒にいはずして前に日を定め其人に盛服させて、重も〳〵しくして傳授せられたのは、拔群の見識であると、室鳩巢も大に稱讃して居るが、是れは佛敎の不忘念である。

六　女に惚れ、職業に惚れ、場處に惚れ

昨年四月廿二日に八十才で亡くなつた、日本一の金巾商薩摩治兵衛といふは、近江國犬上郡四十九院村の生れで、九才の時に父に死なれ、大宮町の酒屋に六年間奉公し、後ちに江戸に出で、日本橋堀留町の呉服商小林金藏方に奉公すること二十一年間、一日の如くにあつたので、同商杉村某が其の忠實なを見込んで、二千圓の資本を貸し、獨立して商買をさせたところが、三年の間に二千五百圓の利益を得、それから次第に發達して横濱、大阪等に支店を開き、三百人の店員を使ひ、六千五百圓の所得稅を收むるほどの資產家となつた人であるが、此人常に「何業でも成功しやうとするには、女房に惚れ、

職業に惚れ、場所に惚れなくていかぬ」といふたと申すことである。

「惚れ」といふ語は卑俗に聞ゆるけれども、その意は的切である。惚は喜好、愛の意であるから、主人がその妻を愛すれば、一家平和で異體同心となり、其職業を好めば、外を慕ふの念なくして勤勉怠らず、加ふるに其住處を愛して他を羨むの心なければ、遠近の信用厚くして、華客も自ら增加し、家運自ら繁昌ずるは疑ひないことである。しかるに世人多く其職業を好まず、只その職業によつて得る所の利益のみを愛するから、却つて成功を見ることが出來ないのである。此語は簡短なれども、成功の要訣を示して餘蘊なしといふべきで、この要訣を記して、忘れなかつたならば、日夜毫も不平の念起らずして、常に春風駘蕩の日送をすることが出來る。

七　喜心、老心、大心

曹洞宗の高祖承陽大師は「典座教訓」といふを著して、典座といつて、寺中の僧衆の食事を調へる役をつとめる人の心得べき事項を示されてあるが、その叮嚀懇切なることは、各宗祖師方の間に比類ない所である。衆僧の食物をこしらへる事などは、下賤の事としてあつて、他宗では多く俗人の奴僕を召し使うてさせたものであるが、禪宗では古來僧侶自ら手を下してすることになつて居り、ことにその職をつとめる典座の役は、とりわけ道心の深き者でなくては出來ぬとしてある。ソコデその典座をつとめる人の心得は、その仕事は勞役であるけれども、之を厭ひ嫌ふの念を起してならぬは勿論、その一職をつとめるのは實に難有事と心の中より喜び、衆僧を思ふこと赤子の如く、その品物の好惡に對して好惡の念を起さず、平等一如の心を有つて食事を辨ずべきことを示されてある。今その要處を和譯してみれば左の通である。

凡そ諸の知事、頭首（役名）及び當職（典職）作事作務の時節、喜心、老心、大心を保持すべきなり。謂ゆる喜心とは喜悦の心なり。想ふべし、我れ若し天上に生せば、樂に着して間無くして、發心す可らず。